

開 会 挨拶



名古屋学院大学 地域連携センター長
名城 邦夫

本日はお集まりいただき、ありがとうございます。ただいまより、「名古屋学院大学 2007年度文部科学省現代GP選定記念キックオフシンポジウム」を開催いたします。テーマは、「名古屋大都市圏の交流・連携の将来を展望する ―大学の役割 地域の役割―」です。なお、私は司会を務めさせていただきます、名古屋学院大学 地域連携センター長の名城と申します。よろしくお願いいたします。

本日は、最初に基調講演として、大阪市立大学の矢作弘先生よりお話をうかがいます。その後、本学経済学部長の木船久雄より、現代GPに選定されたプログラムの概要を紹介させていただきます。そして後半には、2つのトークセッションを予定しております。

それでは、主催者を代表いたしまして、本学学長の小嶋博よりご挨拶を申し上げます。

こんにちは。学長の小嶋でございます。私どものシンポジウムに大勢お集まりいただき、ありがとうございます。本日は、地域の方がたくさんお越しくださっています。皆さんもこのテーマに関心をお持ちなのだな、と思っているところでございます。

私どもの大学は、1964年に名古屋市の砂田橋に創立し、その3年後には瀬戸市へ全学移転をしました。そして、約40年間瀬戸で教育研究活動が続けてまいりまして、2007年4月、この熱田区へ本部機能を移転しました。熱田区は名古屋市の中で高齢化率が高く、そこを何とか活性化させたいという経緯があり、本学が誘致された次第です。

瀬戸市はかつて陶磁器産業が非常に盛んでしたが、やがてそれも下火になり、名古屋のベッドタウンとなりました。駅前の商店街もシャッター通りと化しました。そのなかで、本学としては何とか地域に貢献したいと思い、産業面については審議会等を通じて協力させていただいてまいりました。また、学生が中心となって「マイルポスト」という店を商店街のなかで運営し、商店街の活性化に努め、成功事例をつくりました。これから、その経験を踏まえて、熱田区や名古屋市に貢献させていただきたいと考えております。

さて、文部科学省は、全国の大学の模範となる取り組みをしている大学を、「GP (Good Practice)」というかたちで選定しています。私どものプログラムは、瀬戸での取り組みを名古屋でも活用しようというものです。名古屋や名古屋を取り巻く地域のなかで、本学が一つの役割を果たしながら地域の活性化に努めていこうという提案をしています。

本日は、地域活性化について様々な提言をしておられる著名な先生方に集っていただき、いろいろなお話をうかがいます。地域の皆さんに何らかのご示唆がいただければ、私どもの目的とするところは達成されると考えます。私どもは、現代GPのプログラムをきっかけに、地域の活性化に一層、努めてまいりますので、よろしくお願いいたします。本日は、ありがとうございました。



名古屋学院大学学長
小嶋 博



基調講演

広域都市圏レベルで まちづくり連携を考える

大阪市立大学大学院 創造都市研究科教授
矢作 弘氏

大阪市立大学の矢作と申します。基調講演を申しつけたわけですが、このあとに行われる二つのトークセッションの役に立つような話題が提供できればと思います。

1 City-region

「広域都市圏レベルでまちづくり連携を考える」というテーマで、少し大きな話をいたします。都市をどのように考えるかというとき、最近では「City-region」ということがしばしば言われます。これは、都市と地域の関係を考えながら、あるいは「地域のなかにある都市」という意識を持って都市の在り様を考えることです。

では、なぜCity-regionなのか。市場経済を前提に、あるいは都市間競争を前提に都市の在り様を考えると、いろいろとまづいことが起こるわけです。

例えば、隣同士の自治体が競って無駄な行政投資を行う、というようなことです。要するに、都市間競争を前提にすると、しばしばまちづくりの面では「合成の誤謬」が起きるわけです。「合成の誤謬」とは、個々の経済主体が合理的に物事を判断して行動を起こしても、「その個々の合理的な判断が合わさると全体として間違いになる」ということです。例えば、A町に2万㎡の大型店が進出すれば、A町には固定資産税が入り、地元の人は買物の機会が増え、雇用も発生するというので、A町には非常にいい判断、合理的な判断と言えます。すると、隣のB町が「A町に負けないように」と5万㎡の大型店を誘致し、さらに隣のC町が

7万㎡の大型店を誘致するわけです。そういうかたちで都市間競争が行われた結果、大型店のいくつかが潰れるのか、それぞれの町が疲弊するのか、どこか一つの町が一人勝ちするのか。少なくとも都市圏全体の福利厚生が最大になるとはかぎりません。これが「合成の誤謬」です。

また、国も自治体も財政が非常に厳しいため、「フルセット型の都市」というものを考えていくのは難しいわけです。財政も厳しく、人口も減少し、環境容量も枯渇する時代に、都市圏内の都市がそれぞれフルセットで都市機能を持つことはできません。おそらく隣同士の自治体が都市機能をシェアしなければならないでしょう。

こうした議論を踏まえると、競争よりはむしろ「連携、補完し合うことで都市圏全体としての福利厚生は大きくしよう」という考え方になります。

(1) 都市間連携のかたち

さて、それぞれの都市には持ち味があります。時間的経過のなかで形成される「歴史条件」と、どういう地理的条件のなかにあるかという「自然条件」がクロスするところに、その都市の個性、持ち味、アイデンティティは決まってきます。強さ・弱さといったことも歴史的条件と自然条件のなかで確定されていきます。

また、都市規模と都市機能の配分ということも考えなければなりません。これについては、「中心地システム」という考え方があります。

● 中心地システム

中心地システムというのは、ドイツの都市計画では

よく採用されています。ドイツでは、都市圏にある都市を「上位中心都市、中位中心都市、下位中心都市」というふうに階層化しています。そして、上位中心都市に相応しい都市機能は何か、中位中心都市に相応しい都市機能は何か、ということを明確に示しています。

例えば、心臓移植のできる大病院は上位中心に立地する、盲腸程度の手術をする病院なら中位中心でいい、という具合です。病院機能、文化機能、大学機能、教育関係の機能など、多くの都市機能をどの中心に立地するのが相応しいかを明確に示しています。

この中心地システムの考え方を色濃く反映しているのが、浜松市の「浜松市商業集積ガイドライン」だと思います。このガイドラインでは、浜松市内を「都心、副都心、交流拠点、生活拠点」と、中心になるところを4つに色分しています。そして、都心に相応しい商業機能は何か、大型店規模はどの程度のものが期待されているか等々をかなり明確に示しています。副都心、生活拠点、交流拠点についても同様に、それぞれに相応しい都市機能を示しています。そのようにして、浜松市内の中心地を階層化させているのです。

ここで、さらにCity-regionの考え方を延長していけば、隣接した市町村を含めた浜松都市圏全体における都市の階層化というものが考えられてしかるべきでしょう。あるいは、もっと広く、中部圏での階層化とか、名古屋と浜松の関係がどうなるのか、ということも含めて中心性の多層構造化というのが考えられていく必要があると思います。



(2) 都市間連携の事例

さて、いまや世界のあちこちで、City-regionで物事は考えられ、取り組まれています。

● 川を越える連携

アメリカのミネソタ州、ミネアポリスとセントポールはミシシッピ川を挟んだツインシティですが、この2つのまちはすでに30年以上、この都市圏における税金をシェアしています。セントポール、ミネアポリス大都市圏を対象に、ある基準年以降の固定資産税増収分の4割を都市圏全体でプールし、それを都市圏内で再配分するのです。そういうかたちでタックスシェアリングをして都市圏全体の底上げをしようというわけです。

● 国境を越える連携

ウィーン（オーストリアの首都）とブラチスラバ（スロバキアの首都）は40キロぐらいしか離れていない、国境を越えた、世界で最も近い首都同士です。隣併せと言えます。この2つの都市は、EUのINTERREGというプログラムによって、ウィーン、ブラチスラバ都市圏での協調・連携を進める取り組みをしています。環境、観光、経済開発において、競争よりも連携していこう、そして相乗効果を狙った取り組みをしようということです。

● バイエリアの連携

サンフランシスコ湾の周りでは、サンフランシスコ、オークランド、サンホセあたりにある約270の企業によって、バイエリア・カウンシルというNPOがつくられています。この湾を挟んだサンフランシスコ都市圏では、環境問題、人種問題、疲弊した都市の再生問題等々について、都市圏全体で対応しています。これはNPOの取り組みですが、しばしば自治体同士の連携も見られます。

2 名古屋都市圏の状況

さて、名古屋都市圏の特徴といえば、「三男坊気質、尾張大納言、内弁慶、名古屋モンロー主義」ということです。ただ、これは愛知県気質なのか、尾張気質なのか、あるいは名古屋気質なのか、なかなかはっきりしません。いずれにせよ、この4つの気質がよく紹介されます。日本経済新聞社の『中部維新』という本によれば、「新規参入を排し、仲間うちで果実を分け合おうとする姿勢、東京、大阪を横目でにらみ、3番目でいいという追随型の三男坊主義、なかなか決断しな

い大納言気質…」ということです。では、どこの仲間うちで果実を分け合うのか。名古屋だけで分け合うのか、尾張で分け合うのか、愛知で分け合うのか、中部圏で分け合うのでしょうか。



(1) 独立性の高い名古屋周辺都市

そこで、名古屋モンロー主義ですが、それは「名古屋市モンロー主義」ということで少し話をさせていただきます。

名古屋市モンロー主義だとすると、それは何故か。いくつか事情がありそうです。実は、名古屋都市圏というのは、都市圏内にある都市の独立性が高いようです。名古屋市が突出しているのではなくて、周囲にある都市の独立性が高いということです。トヨタの工場があちこちの都市に分散して立地しているという事情もあります。

また、伝統や歴史を踏まえた非常に個性的な都市が多々あるという事情もあります。東海環状道路の周りには、たいへん個性的で伝統的な産業を基盤とした都市がたくさんあります。瀬戸とか関もそうです。個性的なまちがそれぞれ伝統的な産業を抱えており、名古屋に深く依存せずに成立しているのだろう、とも考えられます。

そこで、「名古屋都市圏の都市は独立性が高い」ということを「三大都市圏の人口上位20都市の昼夜間人口比率」から見てみます。

首都圏において、昼夜間人口比率が「1」を超えているのは、つまり夜間より昼間人口が多いのは、東京23区、宇都宮、前橋です。東京23区の吸引力がいかに強いかがわかります。また、近畿圏で1を上回るのは、大阪、神戸、京都、東大阪、姫路、和歌山ぐらいで、大阪が突出して

います。それに比べて、中部圏では、1を超えるところが非常に多い。名古屋、静岡、富山、福井など13都市が1を超えます。すなわち、東京、大阪に比べて、名古屋の場合は「都市圏内の他の都市との関係については相対性が高い、他の都市の独立性が強い」と言えます。

(2) 中部圏の特徴

「中部は一つ」ということを中部の方はおっしゃいます。実は、九州も「九州は一つ」と九州知事会ではしょっちゅう言っています。また、関西も「関西は一つだ」と知事会も関経連も言いますが、実態はなかなかそうでもありません。関西については、京都、大阪、神戸が三方別々の方向を見ており、まるでヨーロッパみたいだと言われています。それでも、「関西は一つだ」としばしば言っています。

中部の場合、「大中部圏」という考え方はずっとありました。1966年の中部圏開発整備法においては、北陸と滋賀も含めて大中部圏となっています。1964年の国連調査団報告には「東海経済圏と北陸経済圏の連携強化」とあり、これを受けて開発整備計画ができたわけです。そのときは、中部圏を一つにするために、伊勢湾から琵琶湖をつないで敦賀の方まで運河をつくるという、驚くような計画もありました。また、北陸と太平洋側をつないで中部を一つにするアイデアについては、東海北陸自動車道というかたちで実現しています。

ところが、今度の国土形成計画では、「小中部圏」ということで、北陸と滋賀は中部圏に含まれていません。ただ、大中部圏にせよ小中部圏にせよ、名古屋がGateway Cityになることは変わらないと思います。

その中部圏の特徴の一つは、「自然に恵まれていること」です。もう一つは、中部経済そのもののエンジンになっている「ものづくり」です。自然に恵まれているので交流人口も多く、つまり観光産業にとっての条件に恵まれていると言えます。

また、ものづくりに関しては、愛知県は全国の製造業出荷額の約13%を占めていますが、これに静岡県の出荷額を加えると約19%となり、全出荷額の2割近くを中部2県で占めることになります。ということで、自然に恵まれた観光、あるいはも

のづくり経済をどのように持続し発展させていくかが中部圏の課題であると理解しています。

そして、いずれにせよ名古屋がGateway Cityになるということです。中部国際空港という立派な空港もでき、水深16mの名古屋四日市スーパー中枢港もできました。物流、人の流れのゲートウェイになるべく、大きなインフラの整備が進展しています。

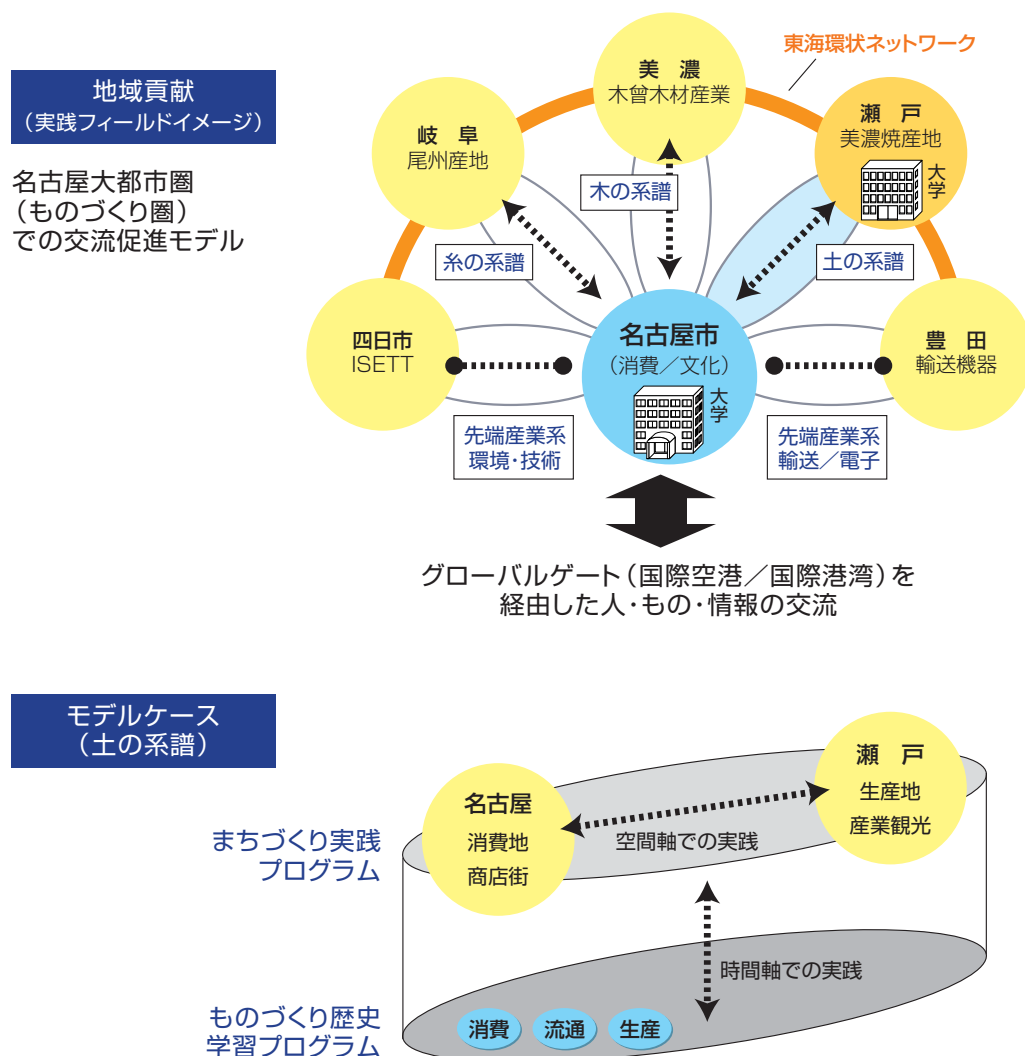
3 名古屋都市圏における「まちづくり連携」の可能性

では、名古屋都市圏において名古屋は、「観光」と「ものづくり」でもってどのようなイニシアチブを取るのか、取れるのか。それが本日のシンポジウムの課題です。

名古屋都市圏には、「糸の産業」、「木の産業」、「土の産業」、「機械産業」というものが明治、あるいはもっと以前の江戸時代からありました。これらが100年、150年かけて世界に冠たる先端産業へと進化してきたわけです。そういう「ものづくりの長い歴史」があるわけです。

そこで、名古屋学院大学の方で作成された「地域貢献（実践フィールドイメージ）名古屋都市圏（ものづくり圏）での交流促進モデル」という模式図を見ると、環状線沿いに伝統的産業があり、あるいはそれを基盤にさらに進化させたハイテク産業があることがわかります。

それらと名古屋とのつながりは「糸の系譜」、「木の系譜」、「土の系譜」、「先端産業系」と表わされています。そして、そのなかで大学が何を果たし得るのかということで、瀬戸と名古屋の関係（土の系譜）をモデルケースとして取り上げます。



(1)「産業観光」による連携

「瀬戸と名古屋の産業観光」というのは、連携の大きなテーマになります。外国から観光客が来る、あるいは国内の人たちが都市観光をするとき、やはり伝統産業や職人の仕事、あるいは匠の仕事を観光資源として活用していくことは一つのテーマになると思うわけです。

瀬戸には「窯垣の小径」というたいへんすばらしいところがあります。400mほどの小径です。昔は陶工や土を運ぶ職人がすれ違うときにおつかるような、たいへん混雑した細い道でした。地元の人は窯垣の小径の良さをぜんぜん認識されていなかったのですが、90年代の初め頃、突然そこに日曜画家が絵を描きにくるようになりました。それで地元の人たちも窯垣の小径のすばらしさに気づいたということです。そこで、「洞町文化会」という守る会をつくり、ボランティア活動を始めているとのこと。

これは、伝統産業、あるいは近代産業遺産、社会的ネットワーク構築に役立っているという事例です。

一方、名古屋の方は、窯業については、「ノリタケの森」があり白壁地区には当時の陶磁器関係の偉い方たちの邸宅や会館等などの資源がのこっています。



窯垣の小径



ノリタケの森

● 名古屋と瀬戸の場合

では、名古屋と瀬戸の産業遺産に関する連携はどうなっているのか。両方の都市についてホームページで調べてみました。名古屋市の方は、「名古屋市公式HP」→「観光情報（名古屋観光コンベンションビューロー）」→「産業観光情報」→「江戸編」→「産業観光スポット」というふうに辿っていきました。さすがに名古屋はものづくりのまちで、「産業観光情報」なんて項目があるのはズコイ、と驚きました。ただ、残念なことに、焼物の瀬戸については愛知県陶磁資料館のことが1件出ていただけです。なかなか瀬戸の陶器に関する資産、近代産業遺産にアプローチするのは難しいようです。また、「名古屋観光モデルコース」というのがあり、やきものに因んだコースとしては、市政資料館から白壁地区までは行きますが、その後は徳川美術館へ行って終わりで、瀬戸まではつながっていません。ということで、現状として名古屋から瀬戸への産業遺産に関するつながりは切れています。

では、瀬戸からはどうかというと、瀬戸物に縁のある近代産業遺産にはまったくアクセスできません。瀬戸と名古屋は、瀬戸物に関する非常に長い歴史的な関係があるわけですから、このあたりをどのように連携させていくか。それが一つの課題になるかと思っています。

● 門司と下関の場合

観光をめぐる連携というのは、実はあちこちで行われています。例えば、門司と下関は、関門海峡を挟んで非常に競争している都市同士ですが、実は観光をめぐるっては都市間連携が進んでいます。市民団体が率先して連携のための運動を起こし、それが自治体を後押ししているようです。門司側には門司まちづくり21世紀の会というNPOがあり、下関側には下関21世紀協会という財団法人があります。

この2つの組織がリードするかたちで、「関門海峡花火大会」というのを実施しています。1980年代前半から始まっているということで、今年は23回目です。この連携はさらに進展し、「海峡マップ」というものを作成するに到っています。また、「維新・海峡ウォーク ～レトロを歩け、海峡を歩け～」というプロジェクトが実施されています。これは、高杉晋作没後120年を記念して始まったのですが、高杉晋作ゆかりの地から下関あるいは門司港まで歩くわけです。2万人が参加するという、たいへんなプロジェクトです。これも市民団体が率先して取り組んでいます。

門司は北九州市の1地区ですが、いずれにせよ2つの都市の連携が関門海峡を挟んで観光ルートを形成することにもつながっているようです。両方のまちを見て歩くと、近代産業遺産だけでなく、出光美術館、詩人の金子みすずさんの史跡とかもあり、二泊三日は十分楽しめる観光コースになっています。門司と下関が、競争ではなくて連携することによって、海峡を挟んだエリアの魅力をアップさせているのです。

● 中部圏では名古屋がイニシアチブを

では、中部圏では誰がイニシアチブをとるのか。たぶん兄貴分の名古屋が周囲の自治体に声をかけるのが連携のイニシアチブをとる第一歩ではないか、と私は考えます。しかし、必ずしも自治体である必要はありません。業界の団体、企業の連合体が連携のモデルのリーダー役になることも可能でしょうし、本日のテーマのように大学が知を主軸に連携の中心的役割を担うことも当然考えられます。ただ、名古屋が動かなければ、なかなか他が動くことは難しいと思います。やはり中部圏の場合は名古屋の役割が大きいですと考えます。

(2)「ものづくり」による連携

最後に、もう一つの柱である「ものづくり」についてお話ししたいと思います。実は、京都では「京都試作ネット」というおもしろいネットワークが機能しています。名古屋都市圏のものづくりにおいても、このようなネットワークが今後形成されていくとよいのではないかと思います。

● 「京都試作ネット」の可能性

京都試作ネットは2003年、京都府南部の機械金属中小企業10社（現在16社）が集って設立しました。インターネットあるいは電話で試作品に関する相談を受け、さらには試作品（単品）の製作まで引き受けるというビジネスモデルをつくりました。相談があると2時間以内に、引き受けるかどうかを回答します。

2007年には、試作品に関する418件の相談があり、うち約120件は実際に試作品を作る段階まで話が進んだようです。ネットで相談がくると、関連企業の職人に「こういうものはできるか」と相談し、できるとなればOKを出して、生産に入ります。売上規模はあまり大きくありません。ただ、ネットを通じて参加企業との関係が非常に深くなってきたため、試作ネットを通じた受注のみな

らず、参加企業間では仕事の協力関係や発注関係が生まれ、結果的に参加企業の売上が5年で3倍近くに膨れ上がったそうです。

それで、この試作ネットのビジネスモデルが非常におもしろいということで、京都の財界や府がバックアップして、試作ネットとは別に「京都試作センター」というプラットフォームを設けました。このプラットフォームには80社が参加して、やはり試作の依頼がくると迅速に対応して、試作品の単品まで作ることを試みています。

● 地域の知・技をネットワーク化し、新しい名古屋ブランドの創出を

京都には織物、焼物、扇子などたくさんの伝統工芸産業がありますが、伝統工芸産業というのは、一人で最後まで作ることはあまりありません。塗る人、削る人、たたむ人、染める人と、それぞれの分野に匠がいて、その匠たちの連携によって一つの完成品ができあがるのです。そういう背景が試作ネットの考え方には反映されています。

つまり、1社で全部を受注するのではなく、個々の中小企業が抱えている多くの有能な職人の仕事を連携させながら一つの先端的な試作品をつくりあげる、ということです。それは、「地域の知なり技をネットワークすること」です。そして、京都の持っている「ものづくりの基盤を強化すること」です。量産品でなく、なるべく高付加価値の製品を、職人仕事のネットワーク、あるいは中小企業の持っている技のネットワークのなかで開発していくのです。その意味では、内発的な地域経済の発展のあり様を模索しているとも言えます。同時に、新しい都市型産業を育てていく可能性をこのネットワークは持っていると考えます。

名古屋の周辺地区にも多くの伝統産業があります。おそらく、それらは名古屋とも歴史的に深い関係があって成立していると思います。そういう意味で、「名古屋といったらトヨタ」というだけでなく、何か新しい名古屋ブランドをつくりあげていくことが必要ではないでしょうか。伝統産業なり伝統技術を基盤に、新しい名古屋ブランドを育てるという意味でも、京都試作ネットというビジネスモデルは名古屋に移植が可能ではないでしょうか。

ということで、この後のより充実したシンポジウムに時間を残したいと思います。私の話は以上です。ありがとうございました。



名古屋学院大学の地域貢献の提案

「地域創成プログラム」の実践

～「もの・まちづくり」をテーマとした地域間交流へ～

名古屋学院大学 経済学部長
木船久雄

2007年4月、名古屋学院大学経済学部は、文部科学省の「現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代GP）」に申請し、8月に文部科学省から選定を受けました。

申請したプログラムは「地域創成プログラムの実践－『もの・まちづくり』をテーマとした地域間交流へ－」というものです。このプログラムは、地域との協働、地域への貢献を目指すと同時に、その過程を通じて学生たちの社会人基礎力を養成するものです。

1 プログラムの背景と目的

本学の教育理念は「敬神愛人」です。「神を敬い、人を愛す」ということです。また、経済学部の教育目標は、「地域社会と協働する良き市民、良きビジネスパーソンの育成」です。このような観点で、これまで「地域参加」型の教育プログラムを実践してまいりました。

「地域参加」型の教育プログラムについては2001年度からスタートし、「マイルポスト」という学生が運営する店をつくり、地域の人たちと共に商店街の活性化に力を注いでまいりました。2006年度からはそれを少し拡大し、「地域創成プログラム」として、学部全体に取り組みを広げました。そして今年度、2007年度は現代GPに申請、採択されたわけです。これについては、地域の拠点再生だけでなく、もう少し地域というものの概念を広げて、地域間交流ということまで視野に入れています。

● 地域創成プログラムの狙い

このプログラムは、私ども大学が中心となって推進いたしますが、地域と関わりを持ちながら進めていこうと考えています。大学には知識や智恵が蓄積されており、また教育に参加している教員・職員たちがいます。そのような知の拠点である組織、ここでは経済学部と地域連携センターになりますが、そこがコアとなって取り組んでまいります。

もちろん、「人材育成」が大学の最たる仕事です。そこで、良き市民を育てるためには、「地域理解」が重要と考えます。本学のある熱田区、名古屋市のことを知ることがまずは大事です。

次に、「地域共生」ということで、名古屋あるいは大都市名古屋圏における等身大の経済を学びます。そして最後に、「地域創造」ということで、熱田区や名古屋市に対して新しい提案をしていくつもりです。これらを通じて人材育成を図ってまいります。

また、これらを実践するためには、「地域ニーズ」が必要です。熱田区は、とりわけ高齢化率の高い地区です。そこで、団塊の世代は有能で様々なスキルを持った方がたくさんおられますが、大学としては、退職後のそういった方々を活用させていただこうと考えています。そして、大学そのものが名古屋市、熱田区の人たちの「ものづくり、まちづくり、ひとづくり」に参加しようというわけです。

そこで、地域ニーズと大学との接点を持つ場としては、地域プラットフォームというものをつくりまします。行政、NGO、住民の方々に参加していただき、そして本学と協働しようということなのです。

● 地域への貢献

では、どんな地域貢献ができるのでしょうか。大きくは、「ものづくり」、「まちづくり」、「ひとづくり」という三つです。

では、「ものづくり」に対して大学はどのような関わりを持てるのか。一つは、アンテナショップをつくることです。また、名古屋と瀬戸に絡んだ商品開発を進めることです。

また、「まちづくり」については、広い地域間交流を視野に入れて、陶街道交流フェスティバルの開催を計画しています。これは、名古屋市と瀬戸市を陶器で結んだフェスティバルです。また、拠点間の交流フォーラムの開催も挙げられます。

さらに、「ひとづくり」については、熱田区の生涯学習センターとタイアップしながら、拠点活動組織の形成、地域コーディネーターの育成といった取り組みを考えています。

つまるところ「ものづくり」、「まちづくり」ですが、地域活性化と地域間交流を含めた「ひとづくり」が最終的な目的になると考えています。

2 プログラムの教育的特徴

では、このプログラムにはどのような教育的特徴があるかという点で、「段階的学習」という点です。1年次から3、4年次まで、学生は徐々に学習のプロセスを踏むことになります。まずは学生自身が、大学の存在する地域の理解をし（地域理解）、地域と共に生き（地域共生）、そして地域への提案をしています（地域創成）。

カリキュラムの中身としては、次のような科目を用



意しています。まず1年次には「基礎演習」として、すべての経済学部生がこの授業の何割かを使って、名古屋市や熱田区のことを学びます。また、個別の科目として、「日本経済史」、「ものづくり経済論」において名古屋市、瀬戸市の固有の歴史を、あるいは、「地域計画論」や「地域政策論」において理論を学びます。また、提案型の授業「地域活性化研究A、B」では、具体的なフェスティバルや観光マップづくりなどに取り組みながら新しい提案を行っていきます。

その結果、学生たちは、課題発見・解決力、自己効力感、他者とのコミュニケーション能力といった「社会人基礎力」を培っていくことができると考えます。いわば地域理解、地域共生、地域創造を段階的に学びながら、それを通じて社会人基礎力を養成するのです。

また、実践型授業を通じて、経済学の基本である「生産・流通・消費」を学びます。こういうことは、テキストだけではなかなか理解しにくいので、例えば今回は瀬戸物という身近なものを通じて「生産・流通・消費」を学ぶことになります。

また、授業の進め方ですが、例えば「地域活性化研究A、B」というのは、1年目はどちらかという点で、人の取り組みを見ることになり、2年目は自ら提案するかたちの授業になります。いわゆる「スパイラル型学習」と呼んでいますが、そういう授業計画をしています。

● 本取り組みの新規性

文部科学省で認められたこのプログラムの新しさとは何でしょうか。

一つは、教育プログラムに生産・流通・消費の交流事業を組み込んだことです。二つ目は、地元住民の生涯学習と連動させていくことです。三つ目は、地域プラットフォームを形成し、そこで学生たちも共に学ぶということです。

3 今後の事業計画

主な事業計画としては、平成19年度から21年度までの3ヶ年を第一フェーズと考えています。実践授業の実施主体は経済学部であり、また大学全体として取り組む「もの・まちづくり事業」については地域連携センターが担います。

経済学部の実践授業については、平成19年度は地域



理解のためのフィールドワークを実施し、熱田区にはどんな観光資源があるかを調査します。実際に観光マップの制作も試験的に行っています。平成20年度には、名産の比較、アンテナショップ（平成20年1月27日にオープン予定）に取り組みます。また、交流事業にも参加します。平成21年度は、名産の開発、店舗経営管理の勉強をし、かつ交流事業に参加する予定です。

また、地域連携センターが主体とする「もの・まちづくり事業」では、地域の方々と交流しながら地域のプラットフォームを確立し、店舗の開業準備を行い、交流事業の事前調査をします。この交流事業については、20年度から本格化させます。20年度は名古屋市が主催するフェスティバルに大学として参加する予定ですが、実際に本学が一つの核となっておりいろいろなフォーラムも主催したいと考えています。

以上のように、19年度はいくつかの拠点プログラムを立ち上げます。そして20年度以降は、拠点間の

交流イベント、産業観光、体系的なマップづくりを進めます。そして、さらに長期的には、現在のプログラムは瀬戸と名古屋の交流を中心に考えていますが、次の段階では、別の系譜への広がりをも展望していくつもりです。

● 名古屋大都市圏の交流ネットワーク

名古屋市の周辺にはいくつかの拠点となる都市があります。これらを結ぶと、東海環状ネットワークなるものができます。名古屋市を中心にした拠点同士のつながりとして、今回は「土の系譜」と言うべく陶磁器産業の瀬戸との系譜を考えていますが、次には、木材産業の東濃との「木の系譜」、繊維産業の岐阜との「糸の系譜」、さらに最先端産業で考えると豊田（輸送・技術）とか四日市（環境・技術）とのつながりも視野に入っています。その際、学生たちに対するプログラムとしては、あくまでも「生産地・消費地という経済的・文化的なつながり」を意識したネットワークを考えていくことになります。

4 おわりに

本取り組みは、名古屋大都市圏の交流・連携を通じて、地域貢献と学生教育の二つの成果を追うものです。地域と大学が互いにメリットのある関係を構築するように努力していきたいと思っています。

はじめに

- 2007年4月、名古屋学院大学・経済学部は、文部科学省の「現代的教育ニーズ取組支援プログラム(現代GP)」に次のプログラムを申請。8月、それが選定。
- 申請したプログラムは「**地域創成プログラムの実践—『もの・まちづくり』をテーマとした地域間交流へ—**」。
- 本プログラムは、地域との協働、**地域への貢献**を指すと同時に、その過程を通じて学生達の**社会人基礎力を養成する**。

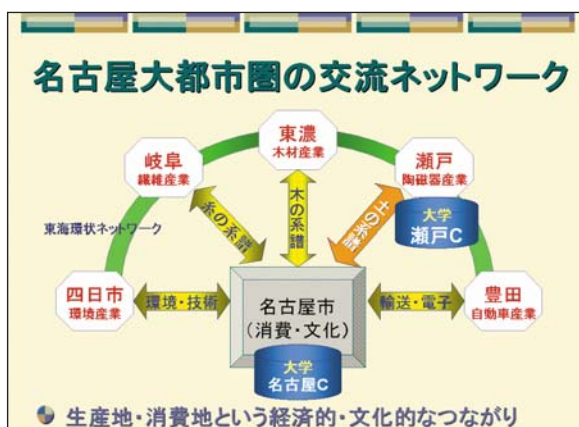
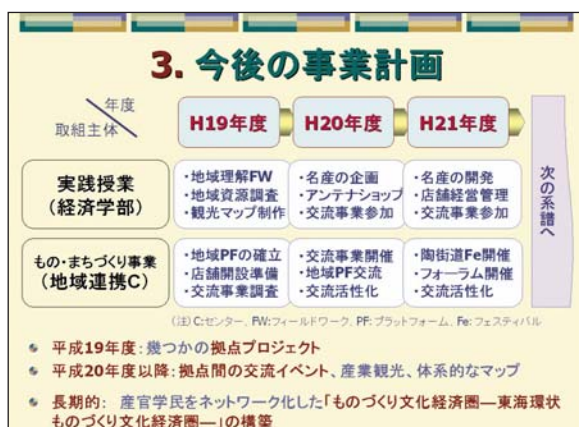
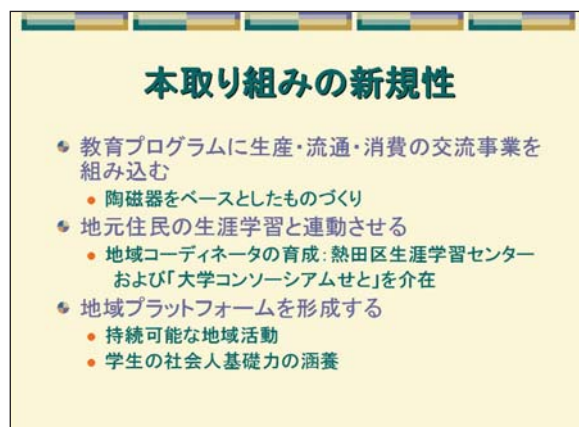
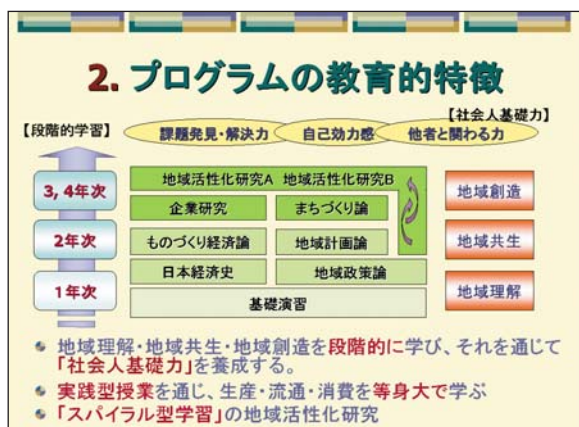
1. プログラムの背景と目的

- 本学の教育理念:「**敬神愛人**」
- 経済学部の教育目標:「**地域社会と協働する良き市民、良きビジネスパーソンの育成**」

↓

「地域参加」型の教育プログラムの実践

- 2001年度からスタート: **拠点再生**
- 2006年度から「**地域創成プログラム**」に脱皮
- 2007年度、現代GPに申請・採択
拠点再生と地域間交流



まちづくり×ものづくり



井澤知旦氏



藤岡伸子氏



古池嘉和

(株)都市研究所スペース 代表取締役 井澤知旦氏

名古屋工業大学 建築・デザイン工学科教授 藤岡伸子氏

●モデレーター 名古屋学院大学 経済学部教授 古池嘉和

【古池】

トークセッションは二部構成になっておりますが、共有するキーワードは「まちづくり」です。第1部では「まちづくりとものづくり」の関係を考え、第2部では「まちづくりとひとづくり」というテーマで話を進めてまいります。基調講演で矢作先生からご示唆いただいた点、ならびに本船学部長がご説明申し上げた「これからの名古屋圏における大学の役割」等をにらみながら、少しフランクに議論をしたいと思えます。

最初に私から、名古屋と瀬戸の関わりについて簡単にお話しします。意外にも、この二つのまちは歴史的に深いつながりがあります。



陶磁器をめぐる名古屋と瀬戸の関わり

昭和初期、日本の全輸出陶磁器の8割は名古屋地域から出ていました。さらに、昭和12年には、陶磁器が名古屋港の輸出上位5品目のトップになります。以後、昭和30年代中頃まで、陶磁器は名古屋、ある

いは四日市から海外へ出ていきました。しかも、それは堀川を船で運んでいったということです。

また、その陶磁器の基になる白い生地は瀬戸や美濃から大量に名古屋に運ばれ、そこで絵を付けて、各国のニーズに対応したものを輸出する流れになっていました。上絵付けというのは、商品にするために必要なことですが、ある意味では芸術の領域になります。ですから、経済、生産、文化的な面でいかに名古屋は陶磁器と関わっていたか、また瀬戸や美濃などと文化、経済的にいかに深いつながりがあったか、ということがわかります。

しかし、矢作先生のお話のとおり、今日ではこのようなつながりは見えにくく、実態としてもつながりはかなり薄くなっています。ならば、ものづくりにまつわる土地の記憶とか、そういった文化的な側面をいかに再特化していまに伝えるのか。さらに、これからの都市圏というものをいかに連携のなかで創造するのか。そういうことを「まちづくり」と「ものづくり」という二つの視点から考えたいわけです。生産地と消費地として、交流や連携を強化するなか、何か新しい都市圏像が見えてこないだろうか。そのなかでの大学の役割とは何か。そんなことを考えていきたいと思っています。

すでに行われている事例として、名古屋市東区にある加藤邸や豊田佐助邸では、東海地域の各陶磁器の産地の作品の展示、また行政や民間の方が交流するセッションなどのイベントが開催されています。一方、産地の瀬戸では、モニターツアーを実験的に行っています。いかに作っている現場を知ってもらうか、あるいはそこで体験してもらうか。そういう

こともすでに試行的には実施していますが、以後3年間は本学が中心となり、この交流をさらに加速させていこうというわけです。

では、(株)都市研究所スパーシア代表取締役の井澤知旦社長と名古屋工業大学の藤岡伸子先生のお二人に、それぞれのお立場から、「この圏域が“焼物”という素材を使いながら今後どうあるべきか」ということで議論を展開していただきたいと思います。

先ほど来、「名古屋圏というのは周辺都市の独立性が強い」という話がありました。

また、名古屋の文化の特徴、産業ネットワークの話もありました。そのなかで名古屋と瀬戸がどのように連携の輪を広げていけるのでしょうか。

名古屋と周辺地域の連携のあり方は (焼物にからんだつながり)

名古屋が近代窯業の拠点となり得たのは、
周辺に焼物産地があったから



【井澤】

いま古池さんが話された、瀬戸と名古屋のつながりのなかで、東区との関わりが出てきました。明治に入り、瀬戸や多治見の陶磁器が輸出品となったわけですが、瀬戸にしても、特に多治見は港から遠い。内津峠とかを越えて、昔は馬で陶磁器を運んでいたわけですが、運んでいる間にかなり割れてしまう。そこで、完成品ではなく、付加価値の低いものを名古屋にもってきて、そこで絵付けして堀川まで運んだわけです。そして、名古屋港はまだできていなかったの、四日市港まで持

っていった。

では、なぜ東区だったのか。東区というのは中級武家屋敷の跡地が多く、だいたい600～700坪、大きい敷地だと1000坪はある。庭も非常に広く、乾すにも適当な広さということで、空間的に最適だったのが東区です。そこに絵付けの企業が立地し、また陶磁器の商社も集まってきて、東区周辺が一大絵付け産業輸出基地みたいになっていったのです。

そういう実績があるので、現在のノリタケが森村組という名前の時代、絵付け工場をどこに造ろうかと考えたとき、「ちょうど瀬戸も多治見も近い、絵付け職人もいる、足らなかつたら京都からよんでくればいい」と、そんな理由で東区に最初の工場を造ったわけです。そこが狭くなり、またこれからは洋食器だということで、現在の名古屋駅から少し行ったところに、1904年、新たな工場を造りました。現在は、一部がノリタケの森という観光施設になっています。ということで、今、瀬戸からノリタケまでの歴史がつながりました。

そして、地域の需要もあって、子会社の日本碍子（日本ガイシ）や東洋陶器（東陶機器／TOTO）が生まれ、さらに、日本碍子の子会社の日本特殊陶業（NGK）も生まれたわけです。

また、イナックスもあります。もともとは伊奈製陶所という土管や建築用タイルのメーカーでした。実は、帝国ホテルを造るときに、フランク・ロイド・ライトが黄色いレンガを使いたいということで全国を探したら、常滑にそれを作る土と技術があったわけです。だから、帝国ホテルのレンガは常滑で焼かれています。帝国ホテル直営の煉瓦製作所の技術顧問をしていた伊奈家はそのスタッフを引き取り、生産の合理化を図って伊奈製陶は創立されますが、そのときには日本陶器の役員、特に大倉和親氏が個人的に資金を提供したということです。

ですから、ある意味で名古屋というのは、伝統的な焼物である赤津焼、美濃焼、常滑焼、万古焼という従来の焼物、プラス近代窯業の中心地だったことになります。近代窯業の礎はみな名古屋から始まっています。もともとは瀬戸とか美濃という産地があるがゆえに名古屋で絵付けが始まり、ノリタケやガイシが生まれた。そういう歴史が連

綿と続いているわけですが、その歴史の拠点が名古屋なのです。

では、窯業だけでもこれだけの歴史があって、それをどうやってつないでいくかが重要なのですが、産業のつながりみたいなのところだけでも相当広がる感じがします。

【古池】

ただ、外から見ると、やはりこの地域は「トヨタ」となってしまうようです。長い歴史のなかでは、生産、流通、文化の面でもかなり焼物と地域のつながりはあるけれど、なかなか見えにくいようです。では、名古屋の持っている陶磁器、焼物を含めたお茶とかお華というような、名古屋の潜在的な文化の力をどう評価されますか。

名古屋で茶の文化が栄えたのは、 周辺に焼物産地があったから



【藤岡】

いま奇しくも、井澤さんが近代窯業についてお話しされましたが、地層のように、もっともっと深いところには古い歴史が当然あるわけです。近代窯業が出てくる地盤として、とても古い窯業産地であったという歴史があるということです。例えば、中世の茶道具は、いわゆる美濃古陶と言われるもので、いまの多治見あたりは日本の文化を代表する茶道の器物を主に提供しています。それを踏まえた茶の文化が、名古屋では非常に栄えました。そして、名古屋の茶の文化は連綿と、今にいたってもつながっていますね。例えば、国宝の「卯花塙（うのはながき）」という志野の器も美濃でつくられました。

では、なぜそういう非常にレベルの高い文化と私たちが直接一つのアイデンティティで結ばれないのでしょうか。それは、近代化にうまく、柔軟に対応してしまったからではないでしょうか。土管や植木鉢を造ったり、洋食器を作ったりと、いろいろな産業にうまく対応し、それを経たことで、その一つ前の地層の記憶を直接的に呼び覚ますことが難しくなったのではないのでしょうか。ですから、近代窯業も非常にすばらしい文化ですが、さらにその奥に潜んでいるもっと深い地層の文化を、自分たちのアイデンティティとして取り込んでいくことができれば、名古屋の文化力はずっとすごいものになると思います。「ものづくりのまち、製造業のまち」と呼ばれたことが刷り込まれていますが、もっと本当の意味での「ものづくりの美学」というものをきちんと持っていた地域の、私たちはその末裔だということを意識することが必要だと思います。

それで、何故いま、まちづくりなのか。小さなコミュニティは一度崩壊してしまいました。それをもう一度つなぐときには、どうしても超越的な価値というものが必要になると思うのですが、それがいまどこにあるかという、第一に「自然」だと思います。すべての人が受け入れられるものとしては、まず自然です。その自然と程よく拮抗しながらつくられてきたものが、歴史・文化・芸術です。理性的な話し合いでは解決できないことも、私たちが持ち続けている文化を核にすればつながれる可能性はある、と私は考えています。

【古池】

近代化も、それはそれで評価されるのですが、その奥底の地層には、ある種のアイデンティティとして共有化すべきものがあるわけです。例えば、陶磁器とか文化といったもの、それをこれからの時代、もう一度呼び起こしたい。むしろ、それがあつた種の近代の行き詰まりに対する何か答えを出してくれるのかな、という気もします。

では具体的に、今日的には消費地となった名古屋があり、その周辺に生産拠点が広がっているこの都市圏においてはなかなか融合ということは難しいわけです。切れてしまったものをもう一度呼び起こして、都市圏を創造するというときには何をすべきでしょうか。

「ものづくり」でつないでいくためには

生産地であることのPRと、その消費地であるというイメージづくりを



【井澤】

一般の人は、「生産」には興味がないわけです。雑誌なんかでいろんな地域のことが取り上げられますが、その傾向を見ていると、ファッションにしても飲食にしても、基本的には「消費」という側面において取り上げられているようです。その「消費」というものを、この地域では「生産」とどうつなげていくかを見せなければいけない。消費だけだったら、東京とか京都とか神戸とか大阪に負けますからね。

例えば、この地域には焼物の産地があるというなら、抹茶茶碗を日常的にどれくらい使っているか、なんてことをアピールしてみてもどうか。しかし、だいたい生産工場のお宅を見ると、日常的にいい食器は使っていません。「もったいない」とか言って、失敗作を使っている感じですよ。やはり、この地域を陶磁器の産地としてPRしたいなら、なにしろ今でも全国の約6割のシェアがあり、特に万古焼の土鍋だと8割ぐらいのシェアがあるわけですから、やはり「日常生活において使われている」ということを意識してPRしていく必要があるのではないかな。この地域の家庭では、小学生が1万円の茶碗でご飯を食べているなんていったら、それだけで「さすが焼物の産地だな」と余所の人たちは感じるはず。『作ったもの＝この地域でも使われているもの』というふうにしたい。

その点、自動車はそういう傾向があります。タクシーの運転手さんといのはだいたい九州とか四国から名古屋に来ているので、「どうですか、名古屋は」と聞くと、「いやあ、この地域は、若い人もみんないい車を持っていますねえ」と言います。つまり、「生産地＝消費地」であり、しかも「若者が車文化に浸っている」というイメージにつながっているわけです。では、他の産業についてはどうかというと、つながっていない。つなげ方が問題だと思いますね。

【古池】

日常において生活文化を高めていくことは、できそうで、なかなかできないものです。特にファストフード文化が浸透してくると、さらに陶磁器離れは進みそうです。そういう文化性というものがどんどん低下していくような気もするんですが…。

「日常的に質の高いモノを使う」というアピールを

【藤岡】

いま、そういうことがまさに変わりつつあると思います。「癒し」という言葉が聞かれ始めた頃からだと思いますが、安い器を3つ買うよりも、こだわりとか自分へのご褒美として、いい器を買う若い女性が増えてきました。ということで、「質の高い、良いものを、数少なく」という傾向は明らかにあると思います。そういう面でもっとアピールしていけば、「名古屋の人たちはこんなに質の高い日常を送っている」という一つのトレンドをつくれる可能性はあると思います。

モノにまつわる物語の掘り起こしを

【井澤】

例えば、「トヨタ、世界一に」という新聞記事がありました。トヨタはもともと織機からスタートしています。豊田佐吉さんは、明治時代に名古屋市東区で豊田商会を設立して、自動織機を開発してきました。そして西区にその実験工場として、豊田自働織布工場を造り（それが現在ではトヨタテクノミュージアム産業技術記念館になっています）、そこで試作品を作り、それを各地域で売っていたわけです。まずこの地域で売り出しますが、案外知られ

ていないのが半田の乙川というところで初期には織機の開発を進め、工場を造って、ある意味でそこが「豊田」を支えたということです。

ところが、そういう話は、歴史上あまり出てきません。というのは、豊田佐吉さんには前妻と後妻がいて、自伝を作ったのは後妻のときで、乙川の件は前妻のときだから、前妻のときの話は載せたくないということで歴史から消えたという説があります（小栗照夫「豊田佐吉とトヨタ源流の男たち」）。これはどこまで本当のことかわかりませんが、そういうエピソードを掘り起こすことで、この東海地域と織機と産業がどうなってきたかがわかるわけです。

もう一つ、こんな話もあります。豊田佐吉さんは、平吉さん、佐助さんという二人の弟がいますが、一番下の弟の邸宅がいまも東区に佐助邸として残っています。その娘さんが伊奈さんと結婚したので、イナックスとトヨタはつながっているわけです。そして、そのときにトヨタから発売された車が「カーリーナ」というわけです。つまり、「Car」＋「Ina」で「カーリーナ」というわけです。これは実際にWikipediaに書いてあります。（現時点で調べると、この解説部分は削除されていました。編集歴は残されています。）Wikipediaは投稿型の百科事典なので、もう一つ別ルートで調べなければいけないと思って、トヨタ関係者に「こんな話がありますが、ホンマですか」と聞いたら、「嘘です、そんなふうに車の名前は付けません」と言われました。クラウン、コロナのようにCから始まるシリーズとしてカーリーナもつくりました、ということでした。

そんなふうに、モノには物語がいっぱいあるわけです。そのあたりをつながげながら現代につないでいってはどうか。物語のおもしろさが人々の興味をひくと思います。もう一つ、消費へつなげる話もあります。そうしたことをセットで取り組まなければいけない。モノそのものではなくて、モノにまつわる物語、意味をつかまなければいけないと思います。

【古池】

確かにストーリーのあるものと、単にモノだけというのでは、おそらく受け取る側には違いがあると思います。そのあたりを考えながらうまくアピールしていくことは大事です。ただ、圏域外の人にアピールするわけですが、内の人にもよく知ってもらわ

ないと意味がない。地域の人たちがそのあたりのことをどれくらいご存じなのか…。そういった意味では、文化をもう一度見直すことは大事だという気がします。その次に、いかにそれを発展させていくか、ということを考えていくかたちになると思います。

実は本学では、商店街に店を出す計画があります。そういうケースにおいて学生たちはどんな役割が果たせるのか、何かアイデアをお持ちでしょうか。

学生は地域でどんな役割を果たせるか

学生の一生懸命さはウケるはず



【井澤】

まだ実験段階ですが、ある旅行会社がツアーのオプションとして「“名古屋城”を“名古屋嬢”が解説する」という企画を立て、実際にやってみたそうです。そのときガイドをやったのは学生ですが、なかなか好評だったそうです。というのは、ガイドボランティアというと普通はお年寄りが多いのですが、若い女性が解説するというギャップがよかったようです。もう一つは、結婚式の司会者やバスガイドみたいに流暢にペラペラしゃべるのではなくて、学生が一生懸命勉強した結果を披露している感じで、うまくはないけれど熱意が伝わってくるところがいかに学生らしいという、そういうギャップもよかった

た。年齢、話し方、学生らしさを意識したということで、狙いがよかったわけです。

それで、学生がそれぞれの地域のことを勉強してガイドをやるとなると、先ほど「コミュニケーション能力を付けるのが社会人の基礎力だ」という話がありましたが、そういう面でも効果があると思います。学習の成果をそういうふう to 活用できるわけです。学生のそういう使い方というのは、学生にとってもおもしろいのではないのでしょうか。

【古池】

うちの学生も堀川のガイドボランティアをやらせていただいています。また、今回のGPで商品開発をしたら、学生が瀬戸へ案内するかたちにしようかと考えています。

また、われわれは日比野商店街で「マイルポスト」という店を運営しますが、藤岡先生や名工大の学生さんは円頓寺商店街で取り組んでおられます。私も久しぶりに円頓寺商店街へ行きましたが、かなり元気になっていった感じがします。もちろん、閉まっている店もまだまだありましたが、人の動きが変わっていると感じました。その話を少しご紹介いただけますか。

学生は魔法を使える



【藤岡】

「円頓寺が変わりつつある」と言っていただけで非常に嬉しいです。私たちの取り組みも一つの力にはなっているかな、と思っていますので…。

円頓寺は、名古屋駅から徒歩15分以内でたどり着ける下町で、「このギャップがおもしろい」とおっしゃる方が多いです。このあたりは名古屋友禅や名古屋の扇子の産地であり、非常に質の高いものづくり、小さな規模のものづくりが集積している場所でもあります。

その円頓寺商店街のなかで、私どもの学生が「自由空間 藁の棲（わらのすみか）」という場を運営しています。きっかけは、愛知県の学生提案型地域づくり事業です。地域に学生が入っていった、そこで地域づくりをするわけですが、その拠点として「藁の棲」をつくりました。

「藁の棲」は設計から施工まで、すべて学生たちの手づくりです。内装は土壁です。モルタルの壁だったところに、ストローベイルという藁のブロックを積んで、その上に泥を塗ったのです。これは、そもそもアメリカ土着の工法ですが、地元のものを使うというこだわりがあったので、伝統的な土壁の土と、安城の方から貰ってきた稲藁を使いました。

作業は5ヶ月ほどかかりました。この作業は学生が地域に根づくための一つの手段になると考え、あえて時間がかかる工法を選びました。地域の人たちは興味津々で見にいらっしゃるし、左官をやっていたおじいちゃんや大工をやっていた方はいろいろ教えてくださいました。その工程を通じて学生は地域で認知されるようになったわけです。「ごくろうさん」と声をかけてくださったり、お菓子やお茶をふるまってくださったり、商店街の方々は学生たちをととても大事にしてくださいました。「学生に何ができるか」という話がありましたが、学生というのは魔法を使えます。すべての壁を突破する力を持っているのです。

それで、「藁の棲」を拠点に、様々なイベントを実施しています。例えば、円頓寺の隠れた魅力を見出そうというデジタルフォトワークショップの開催。陶芸教室の開催。瀬戸や常滑の作家さんとの関わりは非常に深いです。また、商店街にある百年ほど歴史のある下駄屋の娘さんとのコラボレーションでは、いまどきの人たちが履ける下駄の展示と写真展を同時開催しました。また、円頓寺の七夕祭は非常に有名で、学生たちは毎年必ず、七夕のハリボテを作って出していますし、駄菓子屋を出店したことが

あります。地域が駄菓子生産地なので、これを仕入れて自分たちで売って子どもたちと関わるきっかけにする、という企画でした。

あるいは、「キャンドルナイト」という冬至と夏至の日に必ず開催するイベントでは、愛知県の民話をもとに学生が影絵をつくり上映したこともあります。子どもたちに地元のことを紹介していきたいという思いがあります。

このように、ここでの取り組みはすべて自分たちの手づくりで、学生たちは独特の愛着を持っているようです。また、作業をご覧になっていた地域の方たちも、「ここには変なものがあって、あの子たちが頑張っているんだ」というふうに理解してくださっていて、一種の語り草のように伝えられて今日に至っています。



【古池】

名古屋学院大学は瀬戸で「マイルポスト」という店を運営し、自画自賛ですが、かなりの実績をあげました。また、日比野の「マイルポスト」も2008年1月にオープンします。学生や大学が地域と連携してまちを動かしていく事例が名古屋でもいろいろ出てきています。それぞれの活動はささやかですが、それらがつながっていくと、かなり大きな力になるのではないかと考えています。

そういう意味で、今回の例でいくと、周辺の陶磁器の文化を持つ拠点同士が連携して情報発信し合ったり、あるいは「マイルポスト」は商品開発などにも取り組んでいます。そういうところとうまくネットワークすれば、名古屋と瀬戸を結ぶ、あるいは名古屋と常滑、名古屋と美濃などをつなぐことはできないか。陶磁器という素材をわれわ

れのなかでうまく連携させながら文化を発信できるという可能性を感じるのですが、そのあたりはいかがでしょうか。

学生や大学の取り組みを地域連携に結びつけるには

大学も競争でなく連携を

【井澤】

やはり大学でも「地域連携」というのは非常に大きなテーマになっているし、大学がどこかの商店街とつながる事例も増えてきました。矢作先生がおっしゃった「都市間競争ではなくて連携」と同様、いわゆる大学も競争するのではなくて連携することで全体の底上げを図ることは今後の非常に重要なテーマになると思います。そこまでやっている全国的な事例はまだないと思いますので、これをきっかけに取り組めば、名古屋とか愛知県全体のレベルは上がるし、名古屋学院の名前も全国にPRでき、学生はどんどん来るというわけです。そういう仕掛け、いいスパイラルをつくっていくことができると思います。

商店街学生連合なるものの実現を

【藤岡】

「藁の棲」をつくるときには、やはり「マイルポスト」のことは非常に意識しました。それぞれが個性を出して、違う力がつながっていくと大きな力になると思います。商店街学生連合みたいなものを現実にやってみると、「実は名古屋はすごい」ということが出てくるかもしれません。

【古池】

そのあたりのことは、「まちづくりとひとづくり」ということで、トークセッション第2部のメインテーマになります。関西の事例もご紹介いただけたと思います。それでは、水野先生にバトンタッチして、トークセッション第2部に移りたいと思います。よろしく願いいたします。



片寄俊秀氏



日比野辰也氏



一柳良直氏



水野晶夫

トークセッション・第2部

まちづくり×ひとづくり

大阪人間科学大学 環境・建築デザイン学科教授 片寄俊秀氏

熱田区役所 区民生活部長 日比野辰也氏

名古屋市市民経済局産業部地域商業課長 一柳良直氏

●モデレーター 名古屋学院大学 経済学部准教授 水野晶夫

【水野】

トークセッション第2部のテーマは「まちづくり×ひとづくり」です。

先ほどから話題になっている瀬戸の「マイルポスト」というカフェを、私どもは今年3月まで運営していましたが、単に運営するだけでなく、そこを拠点にして様々な地域活動、まちづくり活動に取り組んできました。なかでも、2006年には、マイルポストのある銀座通り商店街が「大学連携」という点で評価され、経済産業省の「がんばる商店街77選」に入選しました。全国には1万数千の商店街がありますが、そのなかで評価された77商店街の一つに選ばれたわけです。これが一番大きな成果だと思っています。

大学によるまちづくり活動について

いまや学生と教員が一緒になって地域に出て活動するかたちは一般的になりました。そういう活動が、大学による社会貢献の新しいアプローチとして認知されるようになってきたわけです。それが、大学によるまちづくり活動が出てきた背景の一つだと思います。二つ目には、まちづくり活動を通じて人材育成をする、という背景があります。三つ目には、こうした活動を通じて大学の存在価値、社会的価値が向上する、という背景があります。地域貢献というと目に見えるため、地域から信頼されるわけです。

しかし一方では、こういう活動は非常に難しく、途中で挫折したり、活動が停滞することがよくあります。本学では、そういう課題に対して一つずつ解決策を講じてきました。

一つには、今回のプログラムがそうであるように、「特色ある教育づくり」の一環として、まちづくり活動を「カリキュラム化」する試みをしています。「地域活性化研究」をはじめとする、いくつかの実践的な授業科目がありますが、学生の主体性を維持するために、サークル的な活動や自主的な組織が連携してカリキュラム化されています。二つ目に、学内の組織体制を整えました。本学では、学生と教員が一緒に行う活動については、今年度から「地域連携センター」が一括して進めることになりました。三つ目に、組織を動かすためには、やはり大義名分が必要ということで、今年度の夏に名古屋市と名古屋学院大学は地域連携協定を締結しました。四つ目に、予算獲得という課題があります。今回は現代GPの選定を受け、その予算をうまく活用しながら地域貢献活動を行いたいと思っています。



本学の熱田（名古屋）での取り組み

さて、本学は名古屋に来て、まだ9ヵ月ですが、すでに様々な活動を進めています。

堀川水上バスでは、学生がボランティアでガイドをしています。熱田区民まつりにも参加し、生涯学習センターとの連携講座も進めています。また、「地域活性化研究」という授業では、熱田のまちづくりマスタープランを作成しています。

また、名古屋でも「マイルポスト」をつくりたいということで、日比野商店街に2008年1月27日にオープンする予定です。すでに商店街の方たちとの関係づくりを始めています。先日、学生たちは商店街の清掃活動に参加しました。日比野商店街、名古屋市や熱田区の職員の方、本学の教職員も加わり、懇親を深めながら、熱田の地でのまちづくり活動を進めていきたいと思っています。

ということで、これをイントロにして、大阪人間科学大学の片寄俊秀先生から少しお話をうかがいたいと思います。片寄先生は10年ほど前、商店街に研究室をつくり、そこでまちづくり活動を始められました。そういう先駆的な取り組みをされてきた方です。

商店街は学びのキャンパス

【片寄】



なかに、「三田ほんまち通り商店街」という少々寂れた商店街を発見しました。かつてはにぎやかな商店街だったのでしょうが、いまや悲しいほど人がいない。それで、そこにある築200年の建物を借り、大学の応援もあり、ここに私のゼミ室をつくりました。ゼミはだいたい夕方の4時半から始めますが、狭いので夏な

10年前、私は26年間勤めた長崎総合科学大学から兵庫県の三田市にある関西学院大学総合政策学部に移任いたしました。学校で何をしようかと考えていたところ、城下町の伝統を引き継ぐ既成市街地の

どは外でやっていました。それで、暗くなってくると近所の方もやって来て、焼酎を飲みながらのゼミになるわけです。これがコミュニケーションのツールとなって、地域の方々とも仲良くなりました。

ほんまちラボ（まちと大学の新しい関係づくり）

その研究室は「ほんまちラボ」といいます。それで、私は学生に何も教えません。「馬を水飲み場へ連れていくことはできるが、水を飲むことはできない」と言いますが、「きみたちは水飲み場へ来たのだから勝手に飲むなり何とかせえ」と言うだけです。学生諸君はそれぞれ自分のテーマを見つけて、いろいろな活動を始めました。

ほんまちラボは1997年にスタートし、地域や商店街の人たちと一緒にいろいろなことに取り組みしました。例えば、子どもたちの「総合的な学習」の応援。「打ち水大作戦」、「そうめん流し」などイベントの実施。近在の農家の方々が作った野菜を売る「旬の市」への協力。住民と学生のコラボレーションでまちの将来を考える「ほんまち未来塾」の開催。また、「まち全体をアートの場にする」ということで、通りに不織布を敷き詰めて子どもたちに絵を描いてもらうイベントも開催しました。こうした活動が全国的に広がってまいりました。そこで、「まちと大学の新しい関係」ということでのネットワークをつくりました。地域と共に何かに取り組んでいる全国各地の大学の学生や先生方が集うわけです。そのなかで、様々なすばらしい活動を見聞きました。

例えば、佐賀大学は、まちのなかの空き店舗を借りていますが、いい場所にあって、ずらっとコンピュータが並んでいます。それぐらい地域としても期待して受け入れたのだと思います。また、尼崎の巨大な商店街では、阪神の5大学を呼び込み、5つのゼミがいろいろと面白いことに取り組んでいます。そして、名古屋学院大学の「マイルポスト」。いま私の勤めています大阪人間科学大学もそうですが、まちで何かを探そうという活動は各地で広がっています。

まちの定点観測で見えてきたこと

さて、そういう活動をするなかで、「商店街は学びのキャンパスだ」と思うようになりました。商店の人た



ちは人を見る目を持っておられるし、いつも頭を回転させておられるので、学生に対する教育力があるわけです。また、商店街の人たちは口が悪いのですが、そういう人たちと付き合っていると、就職試験の面接で何を言われても受け答えのできるパワーが身につくようです。片寄ゼミは就職に強い、と評判になりました。

それで、寂れた商店街に見えても本当に面白いし、あたたかいし、「ここがひょっとするとこれからの未来都市ではないか」と思うようになりました。ジェーン・ジェイコブスが、私より一歩先に同じようなことを言っていますが、「伝統あるごちゃごちゃした狭い通りこそが本物の未来都市だ」ということを私なりに発見しました。

そして、商店街には頃合の卒論テーマがいくつもある、ということも発見しました。例えば、豆腐屋の研究をすると、世界の大豆の生産状況、遺伝子組み換えの大豆についてなど、学生は一つの店を窓口にして大きな研究ができるわけです。そういう意味で、僕は商店街のことを「高度知的集積地区」と呼んでいます。一軒一軒の店が日本の商業界を形成する、あるいは産業界の代表選手なので、それを通じていろいろな研究ができます。まさに卒論テーマは無限にあるわけです。

また、こういうプロセスを通じて、商店街の相互連携もできてくるのではないかと思います。商店街というのは、お店同士の連携がほとんどありません。そういう意味では、新たな異業種交流が始まるかもしれません。

なお、私は関西学院大学を2006年3月に退職しましたが、別の先生が私のあとを継いでくださることになりました。また、「ほんまちラボ」のお向かいの店の方がいままでやっていた店をやめて、「しみん交流館縁」というものを始められました。町屋を改装したすばらしい集り場ができました。

まちづくりは最先端の科学研究課題

このような経験から、「まちは学びのキャンパス」ということと「まちづくりは最先端の科学研究の課題」ということを私は認識しました。まちづくりというのは非常に難しいことです。商店街再生の研究なんてなかなか論文になりません。こういう悩みが研究者にはあります。しかし、まちをこんなにしておいていいのだろうかと考えたら、まさに、まちづくりは最先端の科学研究の課題であるはずですよ。面白い課題がたくさんあると密かに思っています。

【水野】

ありがとうございました。それでは、熱田区役所区民生活部長の日比野辰也さん、名古屋市市民経済局産業部地域商業課長の一柳良直さんにも加わっていただき、4人で話を進めたいと思います。

僕は片寄先生の商店街での活動を知っていましたので、片寄先生に言わせれば「水野は真似をした」ということになるのですが、瀬戸ではカフェというかたちに進化させて取り組んできたつもりです。そもそも「ゼミを商店街に」というふうと考えられたきっかけは何だったのでしょうか。

地域は、大学や学生を長い目で見てほしい



【片寄】

実は、私は現場で働いていて、そのあと大学の教員になったので、講義をするのが苦手なんです。なんとか講義をしなくてすむ方法はないかと考えた結果が、学生諸君を地域に放り込むことだったわけです。放り込んでみると、そこには学生諸君が生き生きと活動する姿がありました。

しかし、地域と大学の連携というのは難しいですね。名古屋学院大学さんが移ってこられて、熱田区の方たちは随分期待しておられると思います。若い学生諸君が来た、智恵の固まりがやってきた、と。大学側も、地域再生を研究テーマや教育テーマにして取り組んでいきたいと思っておられるはずです。それで、最初は蜜月のような時代があると思います。お互いに新鮮ですから、何をやるにしてもうまくいきます。ところが、しばらくすると慣れが生じてきます。そして、学生はどんどん卒業して、見かける顔が変わっていくわけです。名古屋学院大学の学生さんたちは商店街の人たちと掃除をしているということですが、それはいいことですよ。まず、新入生は地域の方と一緒に掃除をして、そうやって地域に貢献したところで地域の方とおいしいものを一緒に食べる。そういうことを積み重ねていくと、次第にうまくいくようになるものです。

また、日本の大学というのは、伝統として実学的な研究はあまりやりません。だから、地域で学生と一緒に泥まみれになって「地域再生」なんて研究していても、なかなか評価されません。ただ、先ほども申しましたが、まちづくりは最先端の研究テーマだと思いますし、それを具体的に世界に発信するのは研究者に課せられた使命だと思っています。難しくてなかなかうまくいかないわけですが…。

そんなわけですから、地域の方々には長い目で見ていただきたい。そして、自分の子として大事に学生を育てられたら、学生にとってはここが第二の故郷になるはずです。きっと、この地域をよくしてくれると思います。

【水野】

瀬戸の商店街でイベントがあると、卒業生もたくさん応援に来てくれます。そうすると、商店街の人たち



はとても喜んでくださる。第二の故郷ということで、いまでも瀬戸とつながりのある学生がたくさん活躍していることを付け加えさせていただきます。

さて、いきなりショッキングな話が出ましたが、そのへんも含めて、これから学生を放り込まれる側の熱田区の日比野さんから、これまでの1年足らずの活動を振り返ってのお話をいただきたいと思います。

地域と大学が協働すると

従来とは違う企画も可能に

【日比野】



私どもも2007年4月の大学の移転をきっかけに、学生さんと共にまちづくり事業を実施してまいりました。この中では、区民まつりへの学生さんの協力というのが、大学との連携という意味での大きな出来事の一つになったと思っています。

熱田区は古い歴史あるまちで、2007年は旧熱田町が名古屋市に編入して100周年という節目の年でした。そこで、今年の区民まつりは、周年事業をあわせて行い、また、場所も名古屋学院大学の東側にある白鳥公園に移して実施しました。当日は40名ほどの学生さんがスタッフとして参加してくださいました。その中で、多くの区民の方に喜んでいただけたものの一つに、堀川を屋形船で名古屋港まで下り、名古屋港で学習活動する「堀川クルーズ」があります。最初は、名古屋港まで船で下っていくだけの予定でしたが、学生さんが堀川の歴史を研究しておられるとのことでしたので、船内で堀川をガイドする

新たな企画に学生さんが係わっていただきました。小・中学生を対象にしたクルーズということで、学生さんも学校で学ばれた知識を子どもたちに幅広く教えてくださいました。子どもたちの意見を聞くと、「40分のクルーズが非常に短く感じられた」とか、「堀川についてなかなか聞けない歴史などを学ぶことができた」と好評でした。

また、区民まつりは、大学の隣の白鳥公園で初めて開催しましたが、大学の食堂やキャンパスを開放していただき、公園とキャンパスが一体となって祭りを盛り上げることができました。

そのように、区民まつりを通じて、ソフト面、ハード面ともに、大学との連携の第一歩を成功のうちに踏み出せたのではないかと考えているところです。

【水野】

では、名古屋市地域商業課長の一柳さんにお話をいただきたいと思います。地域商業課にご尽力をいただき、本学は名古屋市との地域連携協定を結ぶことができました。また、地域商業課では、名古屋学院だけではなく、商学連携ということに取り組み、活動されているということです。そのあたりも含めて、お話をお願いします。

商店街もやる気になってきた

【一柳】

先ほど藤岡先生が「コミュニティの崩壊」ということをおっしゃいましたが、地域の安全・安心とか、コミュニティというものは失われてきているように思います。

実は、商店街というのは昔から溜まり場としてコミュニティの中核の場になることを期待され、その役割を果たしてきたわけです。しかし、様々な理由で、いま商店街は厳しい状況にあります。円頓寺の商店街は元気になってきたということですが、全体的にはなかなか難しく、私どもも商店街の再生事業に取り組んでいるところです。考えてみると、商店街に期待される役割は大きいけれど、商店街のなかには担い手が非常に少なくなっています。そこで、地域の方も結局、学生さんやNPOの方と一緒に考えていくしかないなあ、というわけです。

そのなかで、名古屋市内にはいくつか、大学と商



店街の連携、あるいは高校と商店街の連携による取り組みが生まれています。例えば、桜山と名古屋市立大学は、商店街全体をどう地域と連携させていくかということで、学

生さんが様々な企画を提案しています。まず、かわいらしいウサギのシンボルマークを作ったのですが、これは小学生の作品が公募で選ばれ、名市大の学生が少しアレンジしたものです。それで、このシンボルマークをイルミネーションにデザインしようとか、絵本を作ろうという提案がされています。

また、学生さんや地域の方でお店の評価をしています。あるいは、最近は学生さんが空き店舗の活用についてもいろいろと企画を出しています。それで、「こういうことを地道にやっていると商店街は変わるだろう」ということを商店街の方も少し理解し、やる気になっておられるところも増えてきています。

ということで、商学連携は非常に大事だと思っており、水野先生が瀬戸でやっておられた「マイルポスト」は憧れの的でした。そうしたところ、大学の方から名古屋市と協定を結びたいというお話をいただきました。その際、水野先生は「協定があるから長続きするんだ」と強くおっしゃいましたが、やはり学校ぐるみで取り組んでいただくことは大事だと、いま協定の重要性を感じています。今後さらに連携を深めていきたいと思っています。

【水野】

協定を結ぶということは、持続可能にしていくという意味です。結んだ以上は責任をもって取り組んでいきたいと思っていますので、よろしくお願いします。

片寄先生は最近、非常におもしろいことに取り組んでおられるとお聞きしましたが…。

地域への期待、大学への期待

新しい「学生のまち」をつくってほしい



【片寄】

ヨーロッパで11～12世紀頃にできた大学はみんな商店街から生まれています。商店街にえらい坊さんがいると、そこに若い人が集ってくる。そうして、次第に発展していった、ソルボンヌなどのふるい大学は生まれてきたと言われています。そういう意味で、もともと商店街と大学というのは相性がいいと思います。そういう人が集るところにこそ文化は生まれ人は育つ、という自信を持って商店街の方も取り組んでいただきたい。

それで、私も最近、大阪で新しいことに取り組んでいます。実は自治体の労働組合の職員たちが、「カウンターの向こうへ飛び出して、市民と一緒にまちづくりをしたい」というわけです。そこで、大阪の十三（じゅうそう）にマイルポストみたいな店をつくりました。そこには地域の方々、あるいは学生諸君が来て、新しい活動が広がっています。

しかし、商店街というのは、高齢化社会には非常に向いてますね。私が今度入っている十三の商店街にはデイケアセンターができました。商店街にあるデイケアというのは行きやすいし、帰りに買い物ができるし、人が通っているからにぎやかだし、平地のところが多い。そんなかたちで新しい展開の方向が見えてきたところです。そうしたら、大阪市立大学の女子学生6人が10万円ずつ出資して、そこに店

を出しました。これも是非応援したい。学生たちはいろいろな可能性を持っているので、その芽を育んでいきたいと思っています。

熱田区が過疎化しているのは、つまり子育てに失敗したということですね。今回、地域に大学が来て若い人たちが来たなんて、こんなありがたいことはない。もちろん、いろいろな問題が起きてくるとはありますが、それも含めて、おおらかに、あせらずに付き合っていただきたい。そのへんがこれからの地域づくりでは大事なことです。と同時に、それを踏まえて、学生をうまく育てる文化をつくられたらいいと思います。京都の人たちは学生の扱いがうまいですね。そういう文化ができています。だから、ここがそういう新しい意味での「学生のまち」になればいいと思います。

【水野】

では、日比野さん、お願いします。

大学や学生の目から見た、新たな地域の資産や課題をまちづくりに生かしたい

【日比野】

熱田区は堀川、熱田神宮など歴史的・文化的な資産が非常に多いまちです。そこで、私どもはこれまでも、「歴史的な資産を生かしたまちづくり」を進めてまいりました。また、熱田区は高齢化率が全市のなかで3番目に高い区という状況であり、「子どもから高齢者までがあつたかに暮らせるまちづくり」にも取り組んでおります。こういったまちづくりに



向けては、地域やNPOの方々とまじえて専門委員会をつくり、様々な企画を行っておりますが、今後ここに大学の方が加わっていただければ、われわれには気づかなかった地域の隠れた価値などを発見

し、新しい視点からまちづくりに活かしていけるのではないかと期待しています。従来からある資産に新しい価値を加え、それをまた地域に還元する。そういうサイクルで、まちそのものを新たな目で見直すことができたかと考えています。

もう一つは、情報発信ということです。歴史的な資産がたくさんあることを地域の方はよくご存じですが、区外への発信がなかなか難しいと感じています。そこで、大学は情報発信に関しての専門的な技術を持ってみえると思いますので、そういった意味でも連携を図り、外部にも熱田区の歴史、文化を発信できればと思っています。

また、地域の課題としては、交通安全、防犯への対策などがあります。これらについては、すでに学生さんがボランティアで参加してくださっていますが、今後も地域の課題解決のために力を貸していただきたいと思っています。学生さんたちもこのような活動をすることで、地域の方と顔見知りになり、地域への愛着も生まれ、新たな視点で地域の課題も見えてくるのではないかと思います。今後とも、このような形で、大学との協力・連携の関係を着実に進めることができたと思っています。

【水野】

熱田区のまちづくりについては、地域連携センターの教員が何名か担当しており、それぞれが得意分野で活動していくつもりです。最後に、一柳さん、お願いします。

マイルポストを商学連携の窓口として大いに活用したい

【一柳】

学校と商店街の連携に関わっている人たちに、「商学連携の課題は何か」とお聞きしたら、一つは、「継続性」ということでした。これについては、名古屋学院さんはクリアできると思います。二つ目は、「学生の指導者が必要」。三つ目は、例えば「地域と学生をつなぐコーディネーターが必要」ということでした。それで、学生の指導については、そういう役割は先生が担うだけでなく、やはり地域の方からの指導も必要だと、いま強く感じているところです。



そこで、「マイルポスト」というカフェが日比野商店街にできるわけですが、「コミュニティカフェ」という言葉があるように、そこではコミュニティの種が生まれると思います。マイルポストという場で、地域の方や商店街の方が学生さんに直接話しかけてくださることが、「学生の指導者が必要」という課題解決につながると思います。また、地域には大学への期待がある一方で、いろいろと困惑することもあるかと思っています。そういうとき、マイルポストは窓口として、学生さんに直接、あるいは指導者に伝えることのできる場になると思います。そうすることも連携が長続きするコツだと思います。そこに商店街のコーディネーター役も入られれば、うまくいく仕掛けができるのではないのでしょうか。

また、第1部の話にありましたが、ものづくりでもって他の都市と連携するということでは、雁道商店街が商店街と地域と農村をつなぐことを考えています。瀬戸と名古屋と商店街や地域がつながることも、これをきっかけに進むといいな、と思っています。

また、商店街と大学の連携については、それぞれの地域で個々に取り組んでいますが、お話にあったように、学生さんが複数集まってつくる商店街サポートセンターみたいなものができれば、と思いました。

【水野】

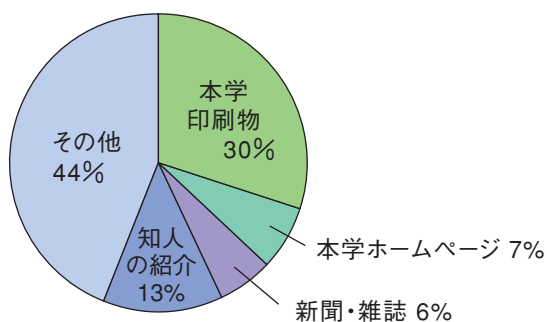
私もまちづくりに関わる以上は24時間営業のつもりです。聴く耳は常に持っていますので、気軽に私ども大学の教職員にも声をかけていただきたいと思います。

以上でトークセッションを終了させていただきます。ありがとうございました。

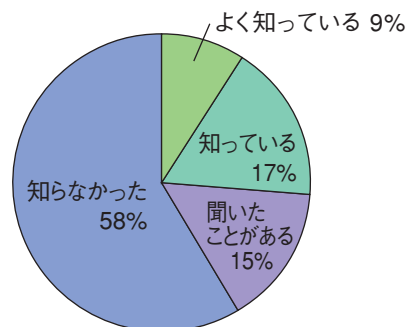
2007年度 現代GP 選定記念 キックオフ・シンポジウム 参加者アンケート結果

回答者数86名／参加者数124名（回答率69.4%）

当シンポジウムの開催を何で知りましたか。

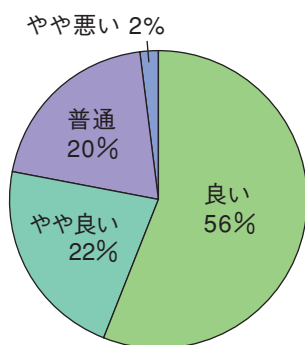


文部科学省が行っている「現代GP」の活動はご存知でしたか。

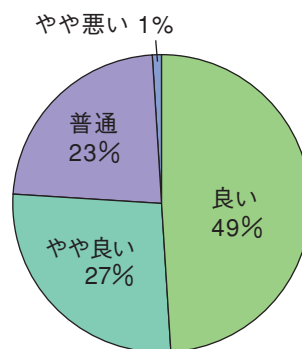


当シンポジウムの以下の項目についての印象を教えてください。

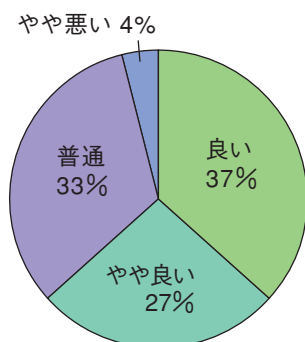
シンポジウムのテーマ



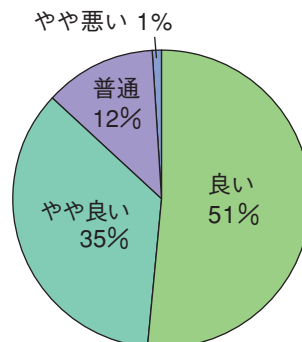
シンポジウム全体の構成



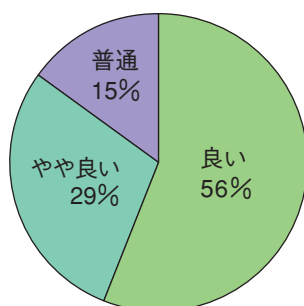
基調講演の内容



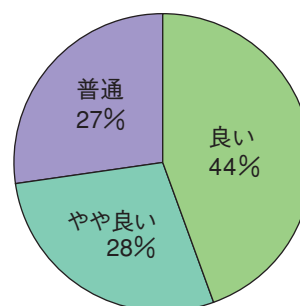
トークセッション第1部の内容



トークセッション第2部の内容



全体の運営



以下の項目につき自由にご記入ください。

▶ 参加してよかった点

一般	● 大学の地域貢献の可能性を見ることができ、明るい気持ちになった。
	● 具体事例の話が多く、また理論的裏づけも添えてわかりやすい内容であった。
	● 都心に回帰したキャンパスと、マイルポスト以外の活動の様子を期待して参加しました。
	● 専門家の掘り下げた生の意見が聞けてよかった。
	● 大都市圏の連携の意味が理解できた。名古屋学院大学の取り組みが良くわかった。
	● 大学と地域との連携、役割が理解できた。まちづくりに参加したい。
学生	● まちづくりの魅力がわかった。
	● 他の大学の活動も同じような活動しており、いろいろと参考になった。
	● 自分がこの大学で学んでいるもの、学ばなければいけないものを再確認できた。
	● これから大学がやっていこうとすることが明確になり理解することができた。

▶ 参加して悪かった点・改善すべき点

● 内容が豊富で、一回では深め切れなかったのではないかな。
● パネラーとして、学生や市民の方に出ていただいてはどうでしょう。
● 講演について一般論の講義も良いがもっと現地の具体例をいれた方がわかりやすいと思う。

▶ その他、要望など

● 学生の声も聞きたかった。
● 地域に関わる大学を目指してください。地域住民として協力します。
● 定期的に行われることを希望する、事業継続の軌道修正に役立つと思う。
● 商店街だけでなく他の分野でも地域との連携を是非持っていただけたらと思う。

経済学部による『「地域創成プログラム」の実践』が文部科学省・現代GPに選定され、2007年度下半期から2009年度末まで経費補助を受けることとなりました。

本補助事業では、本学キャンパスの立地する名古屋市・瀬戸市の交流と地域再生を図るとともに、「地域創成プログラム」の授業科目をリンクさせ実践的な教育を行います。地域貢献の具体的な成果としては、地域プラットフォームの形成、アンテナショップ運営、陶街道交流フェスティバル（仮称）開催などを計画しています。

2007年度事業の概要は以下の通りであり、3カ年にわたる補助事業の円滑なスタートを切ることができました。

もの・まちづくり事業（地域連携センター）

本学は、瀬戸市中心部の活性化において、大学・行政・住民等による「地域プラットフォーム」を構築し、成果をあげてきました。2007年4月の名古屋キャンパス開設後は、名古屋市での地域プラットフォーム確立に向け、包括的な「連携協定」に基づき、地域連携センターが熱田区、区政協力委員会、熱田生涯学習センター、名古屋都市センター、白鳥庭園との間で地域活動について定期的な協議の場を設けることができました。2008年度の早い時期に、より広範な市民団体も参加するプラットフォームとして「熱田区まちづくり協議会（仮称）」を開設する予定です。

名古屋市における拠点活性化のプロジェクトとして、2008年1月27日には、学生の運営によるアンテナショップ「カフェ&ベーカリー マイルポスト」を開設し、本格的な活動を開始しました。また、瀬戸市・名古屋市の地域間交流事業として、次年度に実施予定の「陶街道交流フェスティバル（仮称）」に関する事前調査を行いました。

実践授業（経済学部）

「地域創成プログラム」の授業の一環として、「企業研究2」では企業経営者等を講師に招いた講義を実施し、公開講座として市民にも開放しました。「地域活性化研究A」「地域活性化研究B」は、地域をフィールドとするプロジェクト学習であり、具体的な成果として、地域資源の調査と観光マップの内容検討、堀川活性化、熱田区商店街活性化（マイルポスト含む）などに取り組みました。

名古屋学院大学と名古屋市との連携協力に関する協定

名古屋学院大学と名古屋市との連携協力に関する協定

(目的)

第1条 この協定は、名古屋学院大学(以下「甲」という。)と名古屋市(以下「乙」という。)が、甲の存する地域を中心に包括的な連携のもと、パートナーシップによるまちづくりを基本理念として相互に協力し、地域社会の発展に寄与することを目的とする。

(協力事項)

第2条 甲と乙は次の事項について、情報交換、交流、事業実施等により、連携協力するものとする。

- (1) 商店街の振興に関する事
- (2) 観光の推進に関する事
- (3) まちづくりに関する事
- (4) その他甲と乙が協議して必要と認める事項

(連携協議会)

第3条 前条に掲げる事項の円滑な推進を図るため、甲及び乙で構成する連携協議会を設置するものとする。

2 連携協議会に関し必要な事項は別に定める。

(有効期間)

第4条 本協定は、締結の日から3年間効力を有するものとする。ただし当該期間が満了する6月前までに、甲又は乙のいずれかからも文書による通知がなされない場合には、本協定は、1年間延長されるものとし、以後も同様とする。

(協議)

第5条 本協定に定める事項のほか連携協力の細目等について定める必要があるとき、又は本協定に定める事項について疑義が生じたときは、甲、乙が協議して定めるものとする。

この協定の証として、本書を2通作成し、双方記名押印の上、各1通を保有する。

平成19年10月1日

甲 愛知県名古屋市熱田区熱田西町1番25号
名古屋学院大学
理事長 伊藤 信義

乙 愛知県名古屋市中区三の丸三丁目1番1号
名古屋市
代表者 名古屋市長 松原 武久

名古屋学院大学と名古屋市との連携協力に関する協定に基づく当面の取り組み

●●● 熱田区商店街の活性化

名古屋学院大学では、商店街・地域を活性化させるための実践的なまちづくり教育として、「地域創成プログラム」を設けています。これまでも瀬戸市の銀座通り商店街において空き店舗を借り上げ、カフェと雑貨の店を学生主体で経営するとともに、ここを拠点に瀬戸市と連携し、オリジナル商品の開発や商店街イベントへの協力などにより商店街活性化に取り組み、成果をもたらしてきた実績があります。

大学が瀬戸市で培ったノウハウを生かし
「学生の店」の運営など展開

こうした実績を生かし継承するものとして、名古屋においても熱田区日比野商店街内の空き店舗を活用して学生の店を設置。カフェサロンを運営するとともに、まちづくり活動の拠点とし、大学の持つ豊富な知識やノウハウ、学生の斬新な発想を生かして、大学と市との連携のもと商店街の活性化活動に取り組んでいきます。活動拠点（カフェ＆バーカーリー マイルポスト）は2008年1月27日に開設しました。

●●● 堀川や熱田区の歴史的魅力を生かした地域の活性化

大学では名古屋への本部移転を機に、熱田区の歴史・観光資源を生かした地域活性化の教育研究を新たにスタートさせました。具体的には「学生堀川観光ガイドの育成」「熱田観光ルート開発と学生コンシェルジュ（観光案内等を行う人）の育成」に取り組んでいます。この取り組みを通して、堀川再生への貢献、名古屋国際会議場への来訪者向けの観光マップ作成などによる身近な地域貢献に結びつけていきたいと考えています。今後、こうした大学の活動と、熱田区の魅力づくり事業を連携させて、地域の活性化に取り組んでいく方向としています。

10月6日熱田区区民まつり
学生が堀川観光ガイドなどで協働参画

その具体的な取り組みとして、10月6日（土）に開催の熱田区区民まつりにおいて、学生が協働スタッフとして参画しました。熱田区は2007年、区制70周年・旧熱田町市編入100周年の節目の年にあたり、さまざまな周年記念行事を実施。学生による堀川の魅力、川沿いの史跡スポットなどを案内しながらの観光船運航は、区民まつり及び周年事業の目玉の一つとしています。また、ゴミ・エコスタッフ、会場警備などとしても参加協力しました。

MilePost

〒456-0074 名古屋市熱田区比々野町62番地1(地下鉄日比野駅3番出口より徒歩1分)

Tel&Fax 052-784-7988 URL <http://www.ngugp.jp/milepost/>

come on!!

MP



●●● マイルポスト・プロジェクトとは?

学生運営の店舗(マイルポスト)運営を通じて社会貢献を推進していく「まちづくり推進プロジェクト」で、2002年から2007年までのマイルポスト・瀬戸プロジェクトと2008年からのマイルポスト・名古屋プロジェクトからなります。

瀬戸プロジェクト(2002-2007)では、活動当初、シャッター通りであった銀座通り商店街が、2006年には経済産業省「がんばる商店街77選」に「大学連携」の評価を受けて入るまでに活性化しました。

その実績から、名古屋学院大学では2007年度文部科学省現代GP(現代的教育ニーズ取組支援プログラム)に「地域創成プログラム」が選定され、また、2007年10月には名古屋市との地域連携協定を締結しました。そして、マイルポスト・プロジェクトの名古屋での再開を決定し、2008年1月に日比野商店街の空き店舗をお借りして「カフェ&ベーカリー マイルポスト」をオープンさせました。

●●● マイルポストの役割

ビジネスと社会貢献を通じた「交流拠点再生」

この新プロジェクトは、「地域創成プログラム」のうち「交流拠点再生」の中心的な役割を担っています。通常は、カフェ&ベーカリーの営業を行っていますが、まちづくり・コミュニティビジネスの視点からさまざまな社会貢献活動を推進しています。コーヒーおよび雑貨はフェアトレード商品を取り扱い、また、近隣障害者福祉施設の授産商品も販売しています。

さらに、店舗でのカフェイベントの開催や商店街での清掃活動、各種社会イベントへの参加など、地域共生・地域創造に向けたさまざまな実践活動も行っています。

●●● 視察・報道履歴

学生運営のカフェをまちづくり拠点とした活動は、本学の瀬戸市での取組（2002年－2007年）が全国初であり、また、前述の「がんばる商店街77選」での高い評価もあり、全国から多くの視察団体を受け入れました。そして、名古屋においてもすでに視察団体を受け入れています。

主な視察団体

2007年7月5日	韓国・漢陽大学
2008年2月24日	宮城県松島町商工会青年部
2008年3月8日	埼玉大学
2008年3月18日	香川大学



香川大学様マイルポスト視察

主な報道履歴

2007年12月17日	日経流通新聞「地元商店街で学生カフェ運営」
2008年1月18日	中部経済新聞「名学院大生がカフェ開設 熱田区の日比野商店街に」
2008年1月25日	名古屋タイムズ「新生マイルポスト27日始動」
2008年1月28日	朝日新聞「学生&商店街の喫茶店 名院大生運営 熱田区に開店」
2008年1月28日	中日新聞「名院大生運営のカフェオープン 名古屋・日比野商店街」
2008年1月28日	読売新聞「名学院大生 地域活性化を応援 熱田・日比野商店街にカフェ」
2008年2月13日	ZIP-FM「ZIP-FM「MORNING JACK」
2008年2月26日・ 3月4日・11日・18日	中日新聞「学生之新聞」欄にマイルポスト店長のまちづくり日記が連載
2008年3月26日	東海テレビ「ぴーかんテレビ」



日比野商店街・毎月8の日清掃



名古屋市商店街交流会参加

地元商店街で学生カフェ運営

名古屋市中熱田区の名古屋国際会議場からほど近い日比野商店街に来年一月、焼きたてのパンが食べられる「ペーカリー・カフェ「マイルポスト」」が開設する。店を切り盛りするのは、今年四月に愛知県瀬戸市から三学部の名が古屋学院大学の学生有志約二十人だ。

仕掛け人は経済学部の水野晶夫准教授。まちづくりなど地域政策の講義を担当



人話題

実践的活動 研究に厚み

水野 晶夫さん
名古屋学院大学准教授

のたににもなる」からだ。性化に向け、店主と交渉するなど空き店舗を利用した活動に学生と取り組む。商店街の活性化に貢献する。民が自ら地域作りを担う点



みずの・あきお
1963年名古屋生まれ。名古屋学院大学経済学部経済学科を経て96年から現職。大学と地域の連携を訴え、課外活動で実践している。

に新鮮さを感じた。この体験を契機に、まちづくりなど民間主体の取り組みの研究に専門を切り替えた。実は学生と店舗を運営するのは今回が初めてではない。学部移転前の二〇〇一年に地元の瀬戸市内の商店街で喫茶店を開業した。若者の明るい接客などが評判となり、お年寄りを中心に商店街を歩く人が増え、にぎわいが復活した。この試みは経済産業省から表彰も受けている。新しい町でも「地域と協力し、魅力づく」と意気込んでいる。(名古屋)

名学院大生がカフェ開設

熱田区の日比野商店街に

空き店利用で活性化

27日 途上国の雑貨も販売



シャッター通りの商店街に活気を呼び戻す。名古屋市中熱田区の日比野商店街に二十七日、地元の名古屋学院大学の学生有志が運営する「ペーカリー・カフェ「マイルポスト」」が開設する。店を切り盛りするのは、今年四月に愛知県瀬戸市から三学部の名が古屋学院大学の学生有志約二十人だ。

仕掛け人は経済学部の水野晶夫准教授。まちづくりなど地域政策の講義を担当

約で中華料理やパンなど日比野商店街の雰囲気を演出する。名古屋市中熱田区の日比野商店街に二十七日、地元の名古屋学院大学の学生有志が運営する「ペーカリー・カフェ「マイルポスト」」が開設する。店を切り盛りするのは、今年四月に愛知県瀬戸市から三学部の名が古屋学院大学の学生有志約二十人だ。

約で中華料理やパンなど日比野商店街の雰囲気を演出する。名古屋市中熱田区の日比野商店街に二十七日、地元の名古屋学院大学の学生有志が運営する「ペーカリー・カフェ「マイルポスト」」が開設する。店を切り盛りするのは、今年四月に愛知県瀬戸市から三学部の名が古屋学院大学の学生有志約二十人だ。

再出発

大学生「マイルポスト」

ペーカリー・カフェ

地域と世界に貢献

名古屋学院大学の学生が瀬戸市で昨三月まで運営していた「ペーカリー・カフェ」が、名古屋市中熱田区で再出発する。2007年度度支部学芸現代的教育・文化支援プログラム（現代GP）に選定された同大の地域創成プログラムや、昨年10月に名古屋と締結した「地域連携協定」に基づき活動。瀬戸市と同一「カフェ」を拠点に地元商店街を活性化しようと、11人の学生が店を切り盛りする。開店前に訪問した。

（名古屋）

パン作りの練習に力を入れる名院大の学生たち（名古屋市中熱田区の日比野商店街）

ニュース 特捜隊

午後6時の営業終了後、予約制でイベントの場として提供。近隣の飲食店から料理を取り寄せるなど地域の商店街の紹介も。

分の日比野商店街に「ペーカリー・カフェ」が開設する。訪問時はパン作りの練習中。技術の習得と復興の余念がない。「パンは約100個、冷凍生地から自分たちで作ります」と経済学部4年次生で店長の伊藤彰徳さん（22）。

メニューはほぼエスプレッソ、ハンドドリップ、手作りのスープなど。お薦めはランチで、日替わりの8種から選べるミニバースープ、コッピで500円。プラス100円（ミニサラダ）が付く。

午後6時の営業終了後、予約制でイベントの場として提供。近隣の飲食店から料理を取り寄せるなど地域の商店街の紹介も。

「地域貢献や（フェスティバルを通じての）国際貢献ができれば、学生にとつて4年間楽しく過ごせる場所になりたい」（伊藤さん）

「（二）から地域活性化プロジェクトを進めている」（学生を指導する経済学部の水野晶夫准教授）

日比野商店街振興組合の三輪金理子理事長は「毎月8日の清掃活動には（マイルポストの）学生も参加してくれる。店を定に基き活動。瀬戸市と同一「カフェ」を拠点に地元商店街を活性化しようと、11人の学生が店を切り盛りする。開店前に訪問した。」と期待を寄せる。

マイルポストは02年9月、名鉄瀬戸線瀬戸駅近くの銀座通り商店街で産声を上げた。地域住民や市民団体の交流の場として活動。空き店舗が並ぶシャッター通りだった商店街は活気を取り戻し、06年5月には経済産業省の「がんばる商店街77選」に選ばれた。だが昨年4月に大学が経済学部が瀬戸市から熱田区へ移転。マイルポストは直前の3月に活動を終了した。

現在、瀬戸市で営業中のマイルポストは地元市民団体が受け継ぎ、昨年9月に復活させた店。

「地域貢献や（フェスティバルを通じての）国際貢献ができれば、学生にとつて4年間楽しく過ごせる場所になりたい」（伊藤さん）

「（二）から地域活性化プロジェクトを進めている」（学生を指導する経済学部の水野晶夫准教授）

日比野商店街振興組合の三輪金理子理事長は「毎月8日の清掃活動には（マイルポストの）学生も参加してくれる。店を定に基き活動。瀬戸市と同一「カフェ」を拠点に地元商店街を活性化しようと、11人の学生が店を切り盛りする。開店前に訪問した。」と期待を寄せる。

マイルポストは02年9月、名鉄瀬戸線瀬戸駅近くの銀座通り商店街で産声を上げた。地域住民や市民団体の交流の場として活動。空き店舗が並ぶシャッター通りだった商店街は活気を取り戻し、06年5月には経済産業省の「がんばる商店街77選」に選ばれた。だが昨年4月に大学が経済学部が瀬戸市から熱田区へ移転。マイルポストは直前の3月に活動を終了した。

現在、瀬戸市で営業中のマイルポストは地元市民団体が受け継ぎ、昨年9月に復活させた店。

学生&商店街の喫茶店

大学生の行動力と若々しい発想を商店街の活性化に生かそうと、名古屋熱田区比々野町の日比野商店街の空き店舗に27日、名古屋学院大の学生が運営する喫茶店「マイルポスト」がオープンした。文部科学省からの補助事業の一環で、学生たちにとっては、社会勉強の実験の場となる。地元関係者は「学生と手を取り合って街を活性化したい」と、期待をかける。
(川村真貴子)

名古屋学院大では02年9月から、水野晶夫准教授（経済政策）の指導のもと、瀬戸市の銀座通り商店街で同様の店を運営した。喫茶やネパールなどからのフェアトレード商品の雑貨を扱い、その利益を運営資金にした。学生たちの頑張りもあり、商店街は06年5月に経済産業省の「がんばる商店街77選」に選ばれ、活気を取り戻した。しかし、昨年4月に3学部が名古屋熱田区に移転し、店の運営は地元市民団体にバトンタッチ。同区内で新しい活動場所を探していた。日比野商店街は、同大の移転で約4千人の学生や職員を受け入れることになったのを機に、商店街の再生コンセプトを「名古屋学院大学と国際会議場と商店街」と設定。学生のアイディアを生かした事業で街の活性化を目指すことにした。

も学習社会／期待活性化も 運営生大院名 店開区熱



大学生により運営される「マイルポスト」。初日は多くの関係者が開店を祝った＝名古屋熱田区で

と期待をかける。この日オープンした「マイルポスト」は、同大の「地域活性化研究」などの実践型授業として、学生約20人によって運営される。水野准教授は「瀬戸でも多くの学生が育った。活動を通じて学生たちには実践的な力を付けてもらいたい」と話す。地下鉄日比野駅に近い空き店舗を改装。約50平方メートルの店内では、喫茶と雑貨に加え、瀬戸の店舗にはなかった、焼きたてのベーカリーを始め、地域住民を対象に、店舗（85）へ。

を使ったイベントで街を盛り上げていく予定だ。この日は、大学、商店街の関係者ら約40人が集まり、オープンを祝った。さっそく一般の客も訪れていた。店長を務める経済学部4年の伊藤彰徳さん（22）は「地域貢献と国際貢献の拠点にする」とともに、社会の厳しさを学びたい」と意気込む。

営業は月、火、金、土、日の午前11時から午後6時。問い合わせは同大地域連携センター（052・678・4085）へ。

名院大の学生が運営

日比野商店街にカフェオープン



商店街の空き店舗を利用した名古屋学院大（熱田区）の学生が運営する店「カフェ&ベーカリーマイルポスト」が二十七日、熱田区の日比野商店街にオープンした。店内には学生が店で焼いたパンが並び、早速訪れた

オープン後にぎわうカフェ「マイルポスト」の店内＝熱田区で

「店通じ地域と国際貢献を」

熱田区

ほか、同店を利用したイベントや商品開発なども学生主体で展開する。また店内では、パンクラッシュやネパールなど発展途上国の人々に適正な賃金を支払い、生活向上を支援するフェアトレードの雑貨を販売。店で出されるコーヒーの豆もフェアトレードの商品という。同大は二〇〇二年から瀬戸市で同様の取り組みをしており、文部科学省の支援プログラムにも選定。そのノウハウを生かして、〇七年に移転してきた熱田区でも地域貢献ができればとの考えから開店にこぎ着けた。指導している同大経済学部の水野晶夫准教授は「瀬戸での活動が地域に受け入れられ、自信につながっている」と話し、店長の経済学部四年、伊藤彰徳さん（22）は「店を通して地域貢献と国際貢献をしていきたい」と意欲を見せる。

店が地下鉄日比野駅3番出口から西へ約四十メートル。問い合わせは、名古屋学院大地域連携センター（052・678・4085）（石屋法道）

名学院大生 地域活性化を応援



オープンしたカフェ「マイルポスト」

名古屋学院大学の学生が運営するまちづくりカフェ「Cafe & Bakery Mile Post」が27日、熱田区比々野町の日比野商店街の一角にオープンした。目指す進路を示す道しるべ（マイルポスト）になるようにと名付けられた同店は、実践でまちづくりを学ぶ「地域創成プログラム」の一環。昨年4月に同区に移転した経済・商・外国語の3学部学生ら約20人が準備を進めてきた。

取り組みは、移転前の瀬戸キャンパス時代にも、瀬戸市の「銀座通り商店街」で行われた。同商店街の1日の来

熱田・日比野商店街にカフェ

授業の空き時間に店番

客は800人弱から約1000人に増え、一昨年、経済産業省の「がんばる商店街77選」に選ばれた成果を上げている。

中心メンバー6人は、昨年9月から毎週話し合いを重ねてきた。地域の情報が集まる学内の「地域連携センター」で探した約55平方メートルの店舗は、白と茶を基調とした清潔感のあるつくり。テーブルのデザインや配置も話し合いを重ねて決めた。幅5メートル、高さ1・5メートルの商品陳列棚は、地元の大工の指導を受けながら、自分たちで作った。

店では、焼きたてパンや手作りスープレを出し、コーヒーなどのフェアトレード（公正貿易）商品も取り扱う。また、同店を利用して開かれる懇親会などでは、地元商店の料理も提供する。開店に向けたパンの講習は、テスト期間中で出席できない学生が多く、ビデオに記録し学ぶ方法で解決した。店番は、授業の空き時間で回すことにした。店長を務める経済学部経済学科4年の伊藤彰徳さん22は「学院が来てよかったと地域の人にも思ってもらえるきっかけになれば」と話している。カフェの営業は、定休日の水・木曜日を除く午前11時～午後6時。

Cafe & Bakery
MilePost
カフェ＆ベーカリー マイルポスト

OPEN AM11:00～PM6:00 CLOSE 水・木曜日
名古屋学院大学まちづくり推進プロジェクト

名古屋学院大学では、文部科学省補助事業の平成19年度現代GP（現代的教育ニーズ取組支援プログラム）に「地域創成プログラム」の実践が選定されています。また、名古屋市の地域連携協定（平成19年10月1日締結）に基づき、熱田区でのまちづくり活動を本格的に始めました。平成20年1月27日にその活動の一環として、日比野商店街の空き店舗を活用して、学生運営のまちづくりカフェ「カフェ＆ベーカリー マイルポスト」をオープンいたしました。

マイルポストでは、カフェ＆ベーカリーの営業のほか、フェアトレード商品の取り扱いやカフェイベントの開催などを通じて社会貢献活動を推進していきます。

マイルポストとは、発展途上のモノを作った人に適正な賃金を支払い生活向上を支援する、お買い物を通じていちはん身近な海外協力です。

名古屋学院大学・学生運営のお店
応援よろしくお願いします！

カフェ＆ベーカリー マイルポスト 〒456-0074 名古屋熱田区比々野町2番地1 052-784-7988

平成19年度 文部科学省
現代的教育ニーズ取組支援プログラムに選定
「地域創成プログラム」の実践

文部科学省の取組～Good Practice～

「現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代GP）」では、国の各種資金からの助成などを受け、社会的意義の高い取組活動に際するチームも支援し、これに参画する大学、短期大学、高等専門学校が対象となっている。熱田区の中核として選定された地域を社会に広く情報提供し、高等教育全体の活性化を促している。

名古屋大都市圏の交流ネットワークをめざして

名古屋学院大学の取組

「地域創成プログラム」は、地域の活性化を目的として、地域の資源を活用し、地域の課題を解決するための取り組みです。本プログラムでは、地域の活性化を目的として、地域の資源を活用し、地域の課題を解決するための取り組みです。

名古屋大都市圏の交流ネットワーク

名古屋学院大学は、名古屋大都市圏の交流ネットワークを構築するために、地域の資源を活用し、地域の課題を解決するための取り組みです。

名古屋学院大学
TEL 052-678-4085 FAX 052-682-6812 URL http://www.ngu.jp

地域活性化研究A及び地域間交流事業

経済学部教授 古池嘉和

1 地域活性化研究Aの特徴

「地域活性化研究A」は、現代GP事業のアウトプット段階の授業である。その特徴は、学生が地域の中で、学習の成果を発揮するものである。地域活性化研究は、「地域活性化研究はA1（初年度）」と、その履修生の中で成績優秀者のみ継続履修可能な「地域活性化研究A2」との合同授業であり、A2履修者は、A1に対する指導的役割も期待される。

平成19年度 履修者 (10生カリ:A1) 11名
(04生カリ:A1) 19名
(04生カリ:A2) 12名 合計 42名

2 地域活性化研究Aの成果

【第一段階】熱田区の歴史を良く知る

地域の歴史を調べるために、熱田区に関するクイズを作成し、履修者間で相互にクイズを解きながら地域に対する理解を深める授業を行った。また、履修者に対して、文献調査を義務付け、熱田区の歴史や特徴を、各自がレポートに纏めた。

【第二段階】地域資源を調べる

熱田区役所を訪問し、区の基礎的な情報収集をするとともに、区役所に隣接する神宮前商店街を調査した。神宮前商店街は、門前町の商店街としての歴史を持っているが、現状は、シャッター街になりつつあることが分かった。ただ、個店レベルでは、ユニークな店もあり、今後が期待される商店街ではあることがわかった。

さらに、大学を基点として、国際会議所、堀川、白鳥庭園、熱田神宮、七里の渡しなど、熱田区内の資源の調査も実施した。その際、4班に分けて、各班ごとのテーマを設定し、そのテーマに従った資源収集に努めた。

【第三段階】地域資源の編集

調査した地域資源を元に、資源のルート化（編集）を行った。作業は、模造紙に写真等を貼り付け「提案書」として取りまとめた。

【第四段階】アウトプット段階

模造紙に記載した提案ルートを元に、熱田区の交流を活性化するためのマスタープランを纏めた。また、プレゼンテーションを行うため、パワーポイントを作成した。そして、11月24日(土)に、地域活性化研究の指導教官である古池が担当する熱田区生涯学習センターの講座の中で、各班の代表者8名(2名×4班)が、報告した。報告後は、住民とともに意見交換を行い、活発な交流が生まれるような事業を協働で実施していく方向を確認した。

【第五段階】コースを活かすイベントの実施

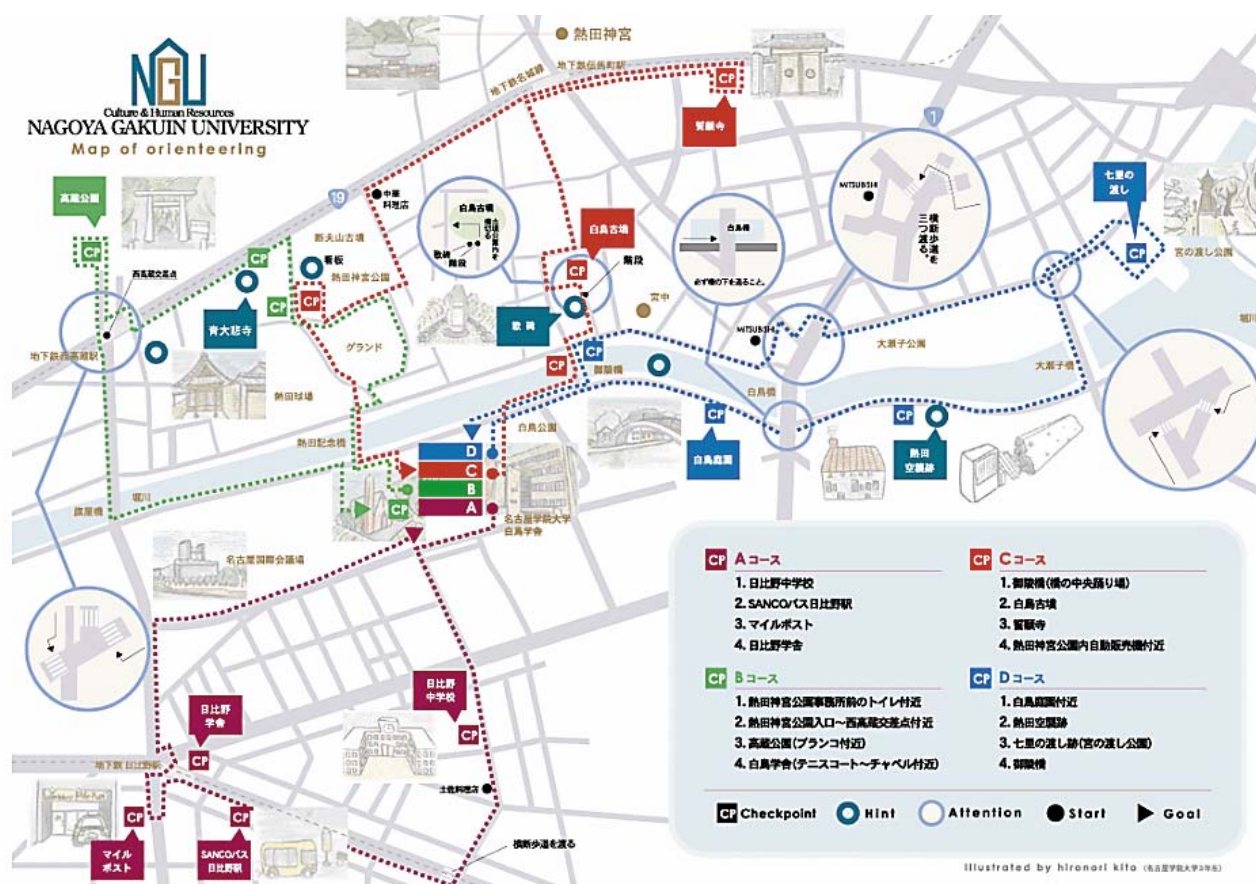
設定したコースを元に、4月にウォークラリーを開催することとした。ウォークラリーは、新年度、経済学部の新入生に対する基礎演習の一環として、実施するものである。ウォークラリーに際しては、地域活性化研究でもリハーサルを行い、問題点等を整理した。

3 ウォークラリーマップの実施

1年次生全員が履修する(春学期のみ)基礎演習は、現代GPの中で、最も基礎的な段階として位置付けられている。その段階で、経済学部生全員が熱田区を理解することが望ましい。ウォークラリーの実施は、新入生が地域への理解を高める契機とするものである。

地域活性化研究では、ラリーコースを設定するとともに、そのためのマップを作成(図1)することとした。なお、マップのデザイン(施設のイラスト)は、地域活性化研究履修者の中で、最も、デザインができる学生が担当した。

(図1)ウォークラリー用マップ



4 次年度に向けて―地域間交流事業の実施

今年度は、熱田区(地域内)での交流促進のための基礎的な段階である。そのため、地域間の交流事業については、次年度の課題となっている。次年度は、熱田区において、陶磁器をテーマとした地域間の交流事業を展開する予定である。

そのイメージプランについては、今年度の地域活性化研究の中でも議論しているが、それは、11月に国際会議場、本学、白鳥庭園を中心とした文教ゾーンにて実施するものである。

地域活性化研究B

経済学部教授 水野晶夫

2007年度「地域活性化研究B」では、20名の受講者のもと、①堀川の活性化、②熱田区商店街活性化（マイルポスト含む）、の2つのプロジェクトを中心に活動し、年度末にその活動成果を研究発表会と研究レポートという形でまとめました。

特に、堀川に関しては、2006年9月に参加した「堀川ウォーターマジックフェスティバル」で実施された堀川水上バスでのアンケート調査分析を踏まえ、2007年度では、堀川水上バス観光ガイドボランティアを計画し、研修を経て、実践しました。



【主な活動】

■ 2007年9月22日

堀川ウォーターマジックフェスティバルでの
観光ガイドボランティア

■ 2007年10月6日

熱田区民祭りでの堀川観光ガイドボランティア

【報道履歴】

■ 2007年10月5日

中日新聞
「名院大学生たち 警備やガイド区行事サポート」

■ 2007年11月14日

読売新聞
「地域貢献で成長する学生」



企業研究2

経済学部教授 名城邦夫

1 「企業研究2」開設の経過

経済学部では大学が名古屋市熱田区に移転するのを機会に、日本経済の中心になりつつある名古屋の地において経済界で活躍する企業経営者の生の声を聞き、その生きる姿に触れることによって学生に社会や経済の意味を理解させ、大学で学ぶ意味について考えてもらう機会を作るために本講義を開設した。企業家の力強い話を聞くことによって、物事に対し積極的に取り組む態度を養い、学生の勉学に対する主体的な取り組みを実現することを期待している。

2006年度カリキュラムから導入された本科目は、もともと経済学部の「企業連携プログラム」の関連科目として設置されたものである。現代GPの申請に当たっては、本科目の趣旨を生かす形で申請プログラムに取り込み、学生の意識の向上に資する目的で展開されることになった。そこで以下では、講義の目的及び具体的開講テーマについて2007年度の講義要項ののちで説明したい。

2 講義の目的

近年、社会の高度化複雑化によって大学に「キャリア教育」が求められるようになった。学生自身にも自己の適性や能力を把握し、職業と結びついた将来ビジョンを提示する能力の獲得の重要性も高まってきている。そこで「キャリア教育」領域を新たに設け「生き方」や「職業観」を育てることを通じて自ら主体的にものごとに取り組む姿勢を育て、問題発見解決能力の獲得を目指す教育が緊急の課題となってきた。

以上のような状況の下、現在大学では将来の針路が明確になるような講義やワークショップの展開が求められている。そこで東海地域の各業種を紹介する講義とワークショップを組み合わせる科目を構想した。

3 講義概要

講義テーマ ～流通・金融業界を中心に市場を知る～

担 当 教 員	笠井雅直(日本経済史)・十名直喜(企業経済論)・名城邦夫(西洋経済史)	
授 業 定 員	80名程度	
目 標	「生き方」や「職業観」を育成することを目指す「キャリア教育」	
開 講 時 限	2007年9月24日～2008年1月9日 水曜日3時限(1時20分～2時50分)	
形 式	行政・企業関係者による講演(60分)	
	担当教員によるインタビュー形式によるポイント整理と質問(30分)	
講 義	1、8回	本学教員による講義 講座の趣旨説明 毎回概要シート提出
	2～6回	流通・金融関係企業トップマネジメントの講演と質疑応答
	7回	あらかじめ与えられたテーマについての小論文作成 「日本・ヨーロッパの金融の発展と近代的市場経済発達史」
	9～13回	金融関係企業トップマネジメントの講演と質疑応答
	14回	あらかじめ与えられたテーマについての小論文作成
評 価	出席と講義概要シートおよび2回の小論文による成績評価	

以下、具体的な開講プログラムを示す。ただし、本講座は大学が名古屋に移転したのを記念して、名古屋市との連携公開講座として開講することとなった。その結果、講義は学生80名、市民40名による大変真剣で、活発な質疑応答が展開される講義となった。

名古屋学院大学名古屋キャンパス開設記念名古屋市連携公開講座

第一部 テーマ「名古屋経済を語る～流通と経営～」

- 第1講 「日本における流通の発達と近代的市場経済の成立」笠井雅直(名古屋学院大学 経済学部教授)
- 第2講 「経済産業省における流通政策について」辻 信一氏(経済産業省 中部経済産業局 産業部長)
- 第3講 「名古屋経済とユニーの企業戦略」鈴木郁雄氏(ユニー相談役・前会長)
- 第4講 「名古屋の市場マインドと、サークルK(コンビニ)の社会的意義」土方 清氏(株式会社サークルKサンクス会長)
- 第5講 担当教員との質疑応答と「名古屋流通業界の未来と私の提言」受講者小論文作成
- 第6講 「名古屋における市場の特性と百貨店経営」松村 茂氏(株式会社三越 取締役常務執行役員 名古屋地区総括)
- 第7講 「企業の創造と国際交流の意義」清水勲氏(株式会社清水屋 代表取締役相談役 前会長)

第二部 テーマ「名古屋経済を語る～金融と経営～」

- 第1講 「日本・ヨーロッパにおける金融システム発展の比較史」名城邦夫(名古屋学院大学 経済学部教授 地域連携センター長)
- 第2講 「最近の金融庁における金融政策について」吉田英都氏(東海財務局理財部長)
- 第3講 「名古屋における金融業の特質と三菱東京UFJの企業戦略」佐々和夫氏(株式会社三菱東京UFJ銀行副頭取)
- 第4講 「名古屋経済と金融業の未来」加藤千磨氏(株式会社名古屋銀行会長)
- 第5講 「名古屋経済における地域金融の意義」石渡世紀氏(瀬戸信用金庫副理事長)
- 第6講 「コミュニティハウスとしての東海地区リテール戦略」石田建昭(東海東京証券株式会社代表取締役社長 最高経営責任者)
- 第7講 担当教員との質疑応答と「名古屋金融業の未来と私の提言」受講者小論文作成

4 評価

講義では、目的意識を持った学生が多くを占め、さらに名古屋市民への公開講座としたこともあって講義はいたって静かで熱心に聴講する態度が目立った。学生は、それぞれの進路への関心から講義後活発に質問していた。授業時間終了後も熱心に質問する姿は特に印象的であった。市民の皆さんも大変年熱心で、学生と市民による相互の影響は特にいい方向に働いたように思われる。

2007年度は、本学出身者以外の講義であったが、次年度以降は関係する企業の本学OBによる講義や座談会等を企画することによって、学生たちに社会人基礎力の必要性やOBたちの努力による達成感を追体験させることによって、本講座の目的をより実現することを目指すべきであろう。